



目 次

更に進め我軍の戦士(時言).....	本多日生
本經祖書要文講義.....	本多日生
世界に於ける日本の地位.....	山田三良
日蓮聖人教義綱要.....	井村日成
遠慮なき皇道大本教の批判.....	記者
記事報道十數件	

第廿五年九月號





# 時 言

## 更に進め我軍の戦士

本 多 日 生

### 三、攻撃の目標

前段には、先づ思想戦の現況に就て申述べましたが、次に日蓮主義者として考ふべきは、その攻撃目標を明らかにする事であり、同じ折伏と言つても力の無い者を相手にする必要は無い、例へば佛教の中に律宗が力を失ふて居るのに律宗を國賊と痛撃しても、無駄な事である。又「真言亡國」といふ事も、最早や真言宗は現代に於て國家問題に對し勢力の無いのに、それに對つて亡國論を力説しても仕方が無い、今日は「真言亡國」を叫ぶよりは、惡思潮が日本の國家を危うして居る、危險思想の方が確かに日本の累を爲さんとして居る、故に會て用ひし「真言亡國」の筆法は之を外來の惡思想に對して、運用しなければならぬ譯である。さう云ふ工合に日蓮主義の攻撃目標を何處に置かうかと云ふ事を考へねばならぬ。今は少しく敵が接んで居るやうに見えるけれども、人間の熱心は強の方が強いのである、この點が大いに注意すべきである。信心するのには夜通し椽の下に這入つて居るといふやうな事は



中々出来ぬけれども、泥棒するには宵から朝まで椽の下蜘蛛の巣の中に屈んで居る奴が幾らでも居る。「是非ともこの本堂にお参りしたい」といふので、熱心に椽の下にひと晩居つたといふやうな人は容易に得難いのである。けれども僅か貳圓か参圓の錢を奪はんが爲に、宵から朝まで椽の下に屈んで居る者は、東京に五千人でも六千人でも居るであらう。さう云ふ譯で悪い事の方の熱心が強い。思想の事でもその通りで、悪思潮を宣傳する者には一種不思議な熱がある、善いから熱があるのではない、善いものは熱誠が起り悪いのである、悪いものには熱がつく。それは手習をするとなれば、少しやつて居ると眠くなるけれども、花合せをすると眼が覺めて安坐をかいて非常な元氣な状態になる、其處が人間の弱點である。この點を大いに警戒しなければならぬ。先年の電車従業員のストライキでも、人格向上の爲に何か貴い事を仕様とすれば多數の者が揃つて賛成はしないが、僅かな要求であつて理由も明らかならぬやうな事で東京市民と戦ふなどと言つて居る。そんな事に何千と云ふ人間が一逼に賛成をして、さうして多くの人が雨に濡れて居るのを見ても、何とも思はないで罷業をやると云ふやうな事は、善い事に就ては中々出来るものではない、悪い事はあのやうに理由も無いのに熱中するのである。彼等を煽てるのは誠に容易い事のやうに思はれる。であるから今の思想の現況がどうなつて居つても中々油断がならぬ、殊に世界的に押寄せて日本の國を弱らさうとする深い謀計もあるからして、日蓮主義者はこの思想戦の現況に就ては、小廉に對して油断をしてはならぬ、飽く迄も健全なる思想を擁護する爲に、責任を帯びて行く決心を要する。今日日蓮主義の僧侶信者であつて大きな聲でお題目を唱へながら、この悪思想が蔓延する時に、この戦ひに参加しないやうな者は實に淺ましい者である。そんな者は日蓮聖人の弟子だなどと申された譯のものではない、そ

れを能く反省しなければならぬ。唯だお経ばかり讀んで居る宗旨ぢやなんと思ふては大間違ひである、日蓮聖人の一代の事業は正邪の戦ひであつた、正しき教、正しき思想、正しき信仰を普及せしめて、その正しき信念を本にして世界の文明に貢献しやうとするのが日蓮聖人の大奮願である。故に今日の如く思想悪化の時代に當りて、日蓮主義者が居眠して居つては、日蓮聖人に對して申譯の無い事である。平生御會式に飛出す元氣を以て、「兎に角この日本人の思想は悪化爲せぬぞ」と決心して、日蓮主義者が憤起一番せねばならぬ時であります。多くのお寺の和尚が、人心の悪化を傍觀して居つて、日蓮宗の僧侶ぢやと言ふは、誠に恥かしい事である。丁度軍人であつて、一國の大事の戦争が始つて居るのに、些つとも戦争の事に参加せずして、田を作り畑を作つてこの戦争に後れを取ると同じぢや。日蓮聖人が本間六郎に向つて、「侍が田作りの爲に戦に後れたとあつては恥であらう、一刻も早く鎌倉に上つて戦に参加しなければならぬ」と仰せられた、これは塚原問答の終りに言はれたと、御遺文の中に出て居る。田作りして戦に後れたと云つては武士の恥ぢや。今日日蓮主義の僧侶にして、この思想戦に参加する事が出来なかつたならば、未代までの恥辱ぢや、どうしても今日は心を入れ直して、この人心の悪化を喚留める爲に力を盡さなければならぬ。それは何も難かしい事を説かないでも宜しい、一軒々々お經に廻るやうに、親父さんでもお女房さんでも捉へて、「今日日本の思想が悪くなつては大變だ、お前の亭主は元氣が好いが、鉢巻して飛出すことはありはせぬか」と言つて、能く親切に「日蓮主義者である以上は、國家の大事を過つてはならない」と云ふ事を話したならば、何も無學の坊さんだからと言つて仕事がない譯でない、此方が無學なら向ふにも無學な人が澤山ある、丁度都合よく出来て居るから、説いて廻る仕事は幾らもある、それを何もしないでポンヤリ



して、唯だお寺で居眠りして居るのでは、進も臨終の時靈山會上に行つて、日蓮聖人に合はす顔はなからうと思ふ。

#### 四、我軍の軍容

其處で我軍の軍容を整へなければならぬ。日蓮主義者の中に居眠りをして居つたり、戦ひに後れたりする者の無いやうに、進軍喇叭が鳴つてもグウ／＼居眠りして居るやうでは實に軍紀が振はぬ事になる、今日は日蓮主義者は所謂宣戰の布告を發して、動員令を下して、一般の僧侶信者は共々に起つて、南無妙法蓮華經と唱へるからにはこの日本の思想の戰の大事には後れを取らぬと決心して、大覺悟を明かにしなければならぬ。私は今度我宗の宗會があるが、全國の議員が大勢集つて來るので、その事に就ては能く訓示して置かうと思つて居る。末派の寺院に於て檀家を集めて、兎に角今度の日本の思想戰は大事であるから、穿き違ひをせぬやうにと云ふ事を能く説き聽かせて、「この場合に穿き違ひをする以上は檀家たる事を斷絶する、南無妙法蓮華經を唱へる事はならぬ」と云ふ風にして、南無妙法蓮華經を唱へる者だけでも、先づ立正安國の精神、日蓮主義で鍛へ上げたる精神を固めて、「南無妙法蓮華經を言う者にはそんな心得違ひの者はない」と云ふ事が、廣く世の中に對して言へるだけにしなければならぬ。細かい難かしい法門などをぼち／＼つたりする事は、學問する者がやる事で、そんな事は後で宜い、假にも題目を唱へる以上は、個人の利益の爲にこの人心の悪化を手傳うて、社會主義であるとか、危険思想であるとか、自分の利益の爲に社會の秩序を亂るやうな事になつてはならぬ。それは實に恐るべき事で、この間から屢々云ふ通り、

惡思想の傳播は實に早いものである、恐るべき勢ひを以て蔓延するものである。日本の勞働問題のやり方を御覽なさい、何れも譯の無いのに電車のストライキをやつて居る、何も東京市民が電車の車掌を怒らせやうな事はして居らぬでせう、この間は電車賃を五割増す事になつて居る、即ち拾錢で乗れたものが拾五錢に値上を市會が決議して居る、彼等の要求の通りにしてやると言つて居る今日、それに戰を開くとか東京市民が敵ぢやと言つて、氣違ひのやうな事をやる。けれども「今度やり損つたから、もう是れつきりやらんやうに」と人は言つて居るが、さうはいかぬ、電車の車掌はやらなくても又他の方がやる、鐵道でもやるだらうし、乗合自動車でもやり出したと云ふ事が新聞に出て居る。このストライキの動機は必ずしも深い理由を要しない。亞米利加などにはチャンとストライキの本部があつて、順番を極めてやつて居る今度は風呂屋、蕎麥屋、天麩羅屋といふやうに、次から次へと順番を極めてストライキをやる。女髪結でもストライキをやる、嫁入てもする人は早速困つてしまふ。さう云ふ譯で獨逸などは、車掌の給金は非常な高いものになつて居る、何としてもストライキをやられては乗らずには居れないものであるから、又給金を増してやる、又給金を増してやると云ふので、普通勞働者の三倍位も取る。電車の車掌がさう云ふやうになると、又他の方でも「やりさへすれば何とかなる」と云ふので始める。左様にして人心が非常に悪化して來た、是は政治家が喰留める事も出來ない、資本家が喰留めることも出來ない、多數國民の力に依つてやるより仕方が無い。今度の電車の罷業でも、國民の自覺が大分起りかけて、學校の生徒が義勇連轉をやるとか、誰もやる、彼もやると云ふやうに、國民が自覺して來た爲に、車掌が弱つて來たのであるが、單に政治家に任せて置いて解決されるものではない。其處で日蓮主義者が大決心をして、東京で電車



のストライキが始つたと言へば、「よし来た、日蓮主義者が相集つて何か役立つ事に働いてやらう」と云ふやうに、社會運動をば、南無妙法蓮華經の名に依つて實行する事にしなければいけません」と私は考へて居る。未だ今日では日蓮主義者は眞の自覺に達して居らない、我軍の軍容が整うて居るとは思はれぬ。今頃唯だボンヤリして昔の通り御開帳をやらうとか、華や線香を賣つて食はうと考へて、この活きた社會問題、或は國家の基礎を危ふするといふ大事な問題に参加する事出来ないならば、如何にも慨嘆の至りである。既に明治維新の當初に、勤王の大義を懐いて王政復古の大事に参加した日蓮主義者の少なかつた事を吾輩は痛嘆して居る。建武中興の時分には日蓮主義者が餘程働いたやうである、それは日蓮聖人の帝都弘通の遺命を奉じて、日像上人を始め京都に於て勤王の大義を主張し、それが段々普及して建武中興に貢獻したと思ふ、又各國の勤王の士を説いて廻つた日蓮主義の人もある、日秀といふ人のやうに、坊さんの姿であつて、南朝の忠臣を聯結する爲に各地を遊説して大いに盡した人もあるし、色々勤王の大義に参加した人がある。けれども明治維新の時には日蓮主義者として餘り働いて居る者が無い。さうすると平常立正安國を唱へ、勤王の大義を叫んだる日蓮の末流としては、之を口舌の上では言ひ、文章の上では言ふけれども、それは所謂講談的勤王主義、講談的愛國主義であつて、實際にはやらぬ。講談師が軍談を讀んで居るやうなもので、岩見重太郎が狎々を退治したと言つて話はするけれども、それは話だけで狎々が出て來たら自分は一番に逃げてしまふ。日蓮主義者が講談的愛國主義であつて、唯だ口ではかり言つて、實際に忠君愛國の力がある者が出ないとしたならば、是は全く詰らぬものでありはせぬかと思ふ。今の時はどうかと言へば、思想の戦であるが故に、法華經に依り日蓮の御教に依つて居る者は、正法を立て、國を安ら

かにすると云ふ正しき思想を人心に與へて、國家の危急を救ふには丁度持つて來いの時である。日蓮主義者に丁度當て嵌つて居る仕事が此處に現はれて居る、この時に日蓮主義者が奮起せぬならば、全く駄目な者である、時代を理解したる者は、本當に國家の爲に、又日本國民の爲に奮闘しなければならぬ時である。この提案は必ずや日蓮主義者の中に勃發して來るであらう、如何に奮つたと言つても未だ驚り切らぬ所もあるから、色々話の間に「一つ運動を起さんければなるまい」との自覺が、今頃眼を摩り／＼考へて居る人もあらう、少し遅いけれどもそれでもさう云ふ人もあらうから、何か其處に現れて來る、私はどうぞ一刻も早く覺めて、さうして日蓮主義者の軍容を整へたいと思ふ。是は僧侶、在家總てを打つて一團として——唯だ今迄のやうに坊さんは説教する者、在家は説教を聴く者と云ふやうな頭腦ではいかん、日蓮聖人の當時でも、決して在家が説法を聴いて居るばかりではない、四條金吾でも富木播磨守でも、皆な法華行者を以て任じて活躍されたのである、決して一人一個の信仰を以て満足するものではない、日蓮聖人當時に於ける僧俗の區域は極めて僅なものである。今のやうに坊さんは法を説く者、在家は法を聴く者と云ふやうになつて居らん、形は違つて居つても左程の區域を立てないのが日蓮聖人の御趣旨であつた。それ故に四條金吾が出家をしたいと云ふ時に之を止められて「別に出家をする必要は無い、汝は在家の姿の儘正法宣傳に貢獻せよ」と仰しやつて居る。又在家の儘にして上人號を贈られて居る者もある、小松原法難の時に工藤吉隆が聖人の爲に奮戦して難に殉じた、その時俗人の儘であるけれども日蓮聖人はこれに上人號を贈つて、「日玉上人」と言つて居られる。侍の儘で居る者に上人號を贈られた。又富木播磨守の後妻になられた人、「眞砂を焼いて生活す」といふから、何か藥のやうな物を拵へて、女の一人の手で子供を養つ



て居つた、非常に熱心な信者であつた婦人、佐渡ヶ島に日蓮聖人流罪の時態、日蓮聖人を訪問した、今日と違つて信州の山を越して佐渡ヶ島に尋ねて行くは容易ならぬことであり、その時に日蓮聖人が之を褒めて、日妙上人と云ふ上人號を贈られた、この人も頭髮を剃つたものではない、子供を伴つて富木播磨守の所へ後妻に行つた、日蓮聖人の媒介でと言つて居るが、それは能く分らんけれども、マア日蓮聖人が富木播磨守に「この婦人は中々確かりして居るから」と云ふやうな話はあつたせう、それで後妻になられたのであるから、坊さんになつたのではないけれど、佐渡ヶ島に於て日妙上人と云ふ號を贈られた。その人の子供が日頂上人と言つて六老僧の一人になつて居る、又その娘さんが中々、えらいので妙國尼と言つて尼さんになつた、それが建てた寺が今私の居る品川の妙國寺である。さういふ工合に日蓮聖人の時は、在家の人が活動して居るので、今のやうにお札を買つて有難がつて居るやうな低級な者ではない、婦人と雖も自ら進んで寺も建て居る位の事、それだけの活動をして居る。それから後の歴史を見ても、天文法難の起因は上總の信者松木新左衛門といふ人か、比叡山に行つて天台の學者と問答をしてやり込めた「何時までも天台の玄義だ、文句だと言つて居つてもいかにだらう、今の時代を何と解釋して居るか、日蓮聖人一度び起つて法華經の正義を主張した以上は、天台宗を捨て、日蓮宗になるのが當然ぢやないか、天台宗は去年の曆ぢやないか」と言つて責め立てた。比叡山の學僧一人として之を言ひ破る者無く、皆なやられてしまつた。それが本になつて遂に天文法難といふ大事件を捲起したのである、これも在家の人の活動であります。それから後にも壓迫を受けて、徳川に於ても日蓮主義を敵にして色々迫害を加へた。その時に千葉縣に澤山の學費を拵へて居るが、これは坊さんの計畫ではない、皆な在家信者が熱心の餘り檀林を造

つたものである、千葉縣だけでも小西檀林、宮谷檀林、中村檀林、飯高檀林、茂原檀林、その他まだ澤山あります、私は能く覚えて居らんけれども澤山の學費がある。盛んな時には一つの檀林に於ても千人からの僧侶を養成して居つた。それは皆な日蓮主義の信者が「教育が大事である、良い坊さんを作つて懸らなければ駄目ぢや」といふので、檀林を造つて教育をして、さうして「新談義」といふ事が今日まで行はれて居つた、坊さんが學問が成就して初めて説教演説する、その日を祝するので非常な盛んなものであつた、「サアあの坊さんが一人前になつた、日蓮主義の宣傳が出来るやうになつた」といふので、之を新談義といふ、初めて講釋をする事である、その時分には説教演説の事を「談義」と言つた。その前には談義停止と言つて、天文法難の後に信長と日蓮主義者との間に調停案の成立つたのは、京都に歸つても宜いけれども、「談義停止」といふ事を言ひつかつた、日蓮聖人の正義の主張は説く事はならぬといふ、ひどいことになつた。後に日經上人に依つてその禁は破れたのでありますが、檀林に於て初めて新談義をする坊さんが出来た時には、皆な赤飯などを拵へて行つて、さうしてこの坊さんが日蓮主義の宣傳が出来るやうになつたと言つて、それを祝福する事は實に盛大なものであつた。それはその坊さんの身内ばかりではない、路に行き合つた知らぬ者でも、小僧に出合つたならば、信者が「お前はどうか、新談義をやつたか」「未だやりません」「もうやれるか」「もう大體準備は出来て居ますが、併し新談義をするには金も要りますから……」「宜しそぢやア俺が引受けてやつてやろう」と云ふので、見ず知らずの者でも熱心に援助して呉れた。それからその坊さんが初めて法を説く事が出来るといふことになれば、非常に喜んで、一人法を説く人を拵へたのは先祖も浮べば自分も成佛が出来る、信者は必ず良い坊さんを一人や二人は拵へなければならぬと云ふ



のて、非常に熱中したものである。今のやうに、寺詣でもした時に茶さへ汲んで呉れれば良い坊さんだと云ふやうな、そんな低級な信者ではなかつた。法事の時分に寺に行つて和尚が茶を汲んで呉れば親類の前に體裁が宜いとか、金を餘計上げて居るから頭を下げるのぢやと思はせやうとか、そんな事を考へて居るやうな者はなかつた。元來日蓮主義の僧侶は内に國民の思想を指導して、健全なる文明を日本に透つて、この國家の團結の力に依つて世界に模範たるべき文明を推し及ぼさうとするので、その中堅となつて活動するが本領であるとするならば、日蓮主義者は高い所に眼を着けなければなるまいと思ふ。

それ故今日は軍容を整へて、上は各派管長始め各派の僧侶は、今日の時代を了解して、道念を振起し、各自の本分に精勵するが、第一の覺悟であらねばならぬ。前にも各派統合の事があつて、それ／＼調印もして、「皆なその通りやりませう」と云ふ事になつて居る、まさか嘘に判を捺した譯でもなからうかと思ふけれども、何時までもグズ／＼して居る、眞に慨嘆に堪えぬことであります。

### 五、排擠よりは同心へ

更に第四には排擠よりは同心へといふ事を理解しなければならぬと思ふ、事實活動する者に對しての排擠は、今日尙ほ少しも改まつて居らぬ。さうして同一宗派内に於ても、少し役立つ人があつたならば、その人を直ぐ傷けるやうな事をやつて居るのである、それ故に目立つて働くやうな人が出て來ない。餘程の變つた者と云ふか、熱心な者と言ふか、或は手腕のある者と言ふか、譏謗迫害の中に葬られないだけの者はどうか斯うか立つて行くけれども、大抵の者は忽ち苗にして摘まれてしまふ。今日は各所に日蓮主義の

宣傳に就て人を要するが、現に今日も各地に演説會があつて、私に出席を要求されて居る、長野からも來て居るけれども、連も忙がしくて行かれない、誰か他の人と云ふと「他の人と仰しやつても……」といふやうな譯で、實に情けない譯である。日蓮主義が斯の如くに勃興する時に於て、兎に角六千なり七千なりの坊さんも居る譯であるから、一割實れば七百人ぢやないか、百分の一にした所が七十人は實らんければならぬ譯ではないか、實に慚愧の至りである。それは青年の者に多少志があつても、直ちに之を排擠してしまふ、必ずや色々の事を言つてその人が立てぬやうにする。私等でも今日に來たる間には、幾度か譏謗迫害があつたけれども、こつちは我武者な者であるから、そんな事に構はない、幾度か迫害を受けて宗門を放り出された事もあるけれども、放り出されても構はないでやつて來た、それは突ついたり叩いたり一人や二人の者ではない、時には大勢の人が團結を組んで、新聞を買収したりして色々やるのである。それがどうか斯うか牛にも踏まれず馬にも蹴られずして來たやうな譯であるが、大抵の者は皆中途で倒れてしまふ。これ皆排擠の致す所であつて、各宗はいま尙その通りで、少しも改つて居らない。それであるから何故人物が出ないかと言へば、人物が出ないやうな惡習に累せられて居るのである、この弊害を一掃しなければ、日蓮主義の大活動は起るまいと思ふのであります。今迄も私は日蓮主義の各派間に於ては、何時も調和の態度を取つて、統合を唱へて來た、自分に主義が無いと言へば、私は自分の正確なる信念および主義を有つて居るけれども、併し日蓮の門下が分れて居るのは意味の無いことであり、どうしても一緒になるが宜いと思ふ。分裂の理由に就ては、「それ／＼尤な理由があつたのだ」と言つて煽てる人もあるけれども、吾輩は立派な理由はないと信ずる。分派は誤解より起つて居るものである、詰らないこ



とである、餘りにえらくない人が考へたから分派したのである。何を以て證明するかと言へば、分派の理由として今日まで残つて居る主張を見給へ、此席にも色々の派の人が居らるるだらうが、考へて見給へ、最初身延と富士の間の分派したと云ふのは、何が分派の理由であるか、大體ハッキリした證據も無いし、その間に言ひ傳へられて居る事は詰らないことである、波木井殿が三島の明神に戸張を寄附したのを日向上人が小言を云はなかつたとか、或は神馬を牽いて神詣をしたとかいふので、假にそれが悪い事としても、それは相互の間に話合ひをしたならば、そんな事で分派する必要は斷じてない、一人の信者が誤解をして、例へば今統一閣に来て居る信者が、それから本願寺にお参りをしたと言つて、直ぐ分派をせんならぬことは無いぢやないか、是れは解決の方法は他にある。總て從來言うて居る所の分派理由は、學問上から言うても小さな議論である、例へば方便品を讀むとか讀まぬとか云ふやうな事でも、方便品を讀んで行くところが毒量品と同じ事になるとか、違ふとか、一方は壹圓の値打があれば一方は八拾錢しか無いと言つたりして、相争ふて居る、それは議論の根據はどつちにもあるにして見た所が、それで兩方が分派して行くならば、その分派の損害は、その問題以上の損害である。その争ひの爲に受ける損害はどうするか、例へば番頭が二人で商賣するのに、此處に帯と反物がある、一方は同値で賣らうといふ、一方は反物は七圓で賣らう、帯は拾圓で賣らうと言つて喧嘩をする、その爲に客は吃驚して逃げて行つてしまふと云ふ事になつたならば、こんな馬鹿な話はない。そんな事で喧嘩して居るから毒量品も有難味が無くなつてしまふ、「法華宗は何も有難味が無い、坊主のカラ喧嘩だ」といふことになる、それではいけない。もつと有難いことに就て法華經の眞精神を發揮して行きさへすれば宜いのである、唯だ我見に提はれて、自分が一

且言ひ出したと云ふやうな事に依つて、「俺が言うた事であるからどうしても通さんければいかぬ」と云ふやうな事では、教へに忠實の人とは云へぬ、己れの顔を立てんが爲に法に疵をつけ、己れの主張を達せんが爲に大聖人の教義を忘れるといふ、今日でもさういふ者が居るやうである、好い加減の事を言ひ出してそれを何處までも維持せんとするが故に、往いて法に疵がつく。だからそんな奇矯な變手古な事を言ふ必要はない、天下萬人に共通したる正義を奉じて進みさへすれば宜いのである。例へば血脈が此方にあるとか、あつちにあるとか言つて喧嘩するけれども、日蓮聖人が書かれて居る所の「生死一大事血脈鈔」に依れば、異體同心が血脈ぢやと仰しやつてある、此方にある、彼方にあると云つて喧嘩するならば、その時それが一番に血脈を破つて居るのぢやないか、この位正確な事はない。

總じて日蓮が弟子檀那等自他彼此の心なく水魚の思ひを成して、異體同心にして南無妙法蓮華經と唱へ奉る處を生死一大事の血脈とは云ふ也。

水魚の思ひを成して異體同心を心懸けるのが日蓮聖人の血脈である、一人一個が特別の譲りを得たと云ふ様な事ではない。所謂日本の國民性としては、億兆心を一にして世々厥の美を濟すといふ、この團結心が國民性であるが如く、「俺の方に善い事を傳へて居る」と云つて自分が空威張して居る様な、さういふ狭い了簡の所には日蓮主義は亡びて居る、何でもない事を「自分の方にだけある」と云ふから、互ひに「俺の方が「俺の方が」と言つて喧嘩する事になる。假令讓狀があつたとした所が何でもないぢやないか。同じ物を貰ふのにも數珠を貰つたと言へば、それは數珠が手許にあつたから數珠を貰つたといふだけである。宗教は普遍的なるもので、日蓮聖人が六十年間の薰陶に依つて弟子檀那は皆な異體同心の信仰を得たので



ある、その信仰は共通なるものである、一番よい物を皆が與へられたのである。一番よい所といふものは一團浮提に廣宣流布せしむべきもので、決して難かしいものではない。日本て言へば天子様が大事ぢやといふ事、日本人が億兆心を一にして世々厥の美を濟して、何人と雖も皇室の尊嚴は皆な知つて居る、日蓮主義はそれと同じで、何も一人位がヨソ／＼内緒で聴くといふ様な事は大した事ではない。それをさういふ詰らない事を言つて互ひに排擠をし合つた。これは真に悪い事で、この「血脉鈔」を能く讀んで見ますと、左様にして互ひに争ふは、城を守る者が城を破るが如きものである、所謂賣國奴であつて、城の中に居つて城の中から敵軍を導く者である、この位恐るべきものはない、籠城をして敵と戦つて居る時分に敵に内通をし敵の手引きをして、夜門を開けて這入つて來いといふ様な者はその城を落さす者である、日蓮主義者が排擠をし合つて居る事は敵をして乗せしむる者である。又これが一人に取つては異體同心の心懸けが成佛の功德となり、それに依つて廣宣流布の大願も叶ふべきものなりと仰せられた。その廣宣流布といふ事が日蓮主義者の最も大事な共通の志願である、丁度日本て申したならば國威八紘に輝くといふ、この國威を輝かす事が國民共通の自覺であると同じで、この教が廣く世界に弘まつて行く事を、日蓮主義者は第一の志願として居るのである。されば今迄の分派の理由を認めて行く事は、どうしても出來ない事である、分裂は罪惡であると断定しなければならぬ。私は今日は未だ外に戦つて居るから、左様な内輪の事には直ちに聞ひを聞かんけれども、或る時期に至らば何處迄も左様な事に引つ懸つて、さういふ分派心の爲に共同一致して進む事が出來ぬと云ふならば、その理由なき所以を明晰にしたいと思つて居る。



## 本經祖書要文講義

本 多 目 生

### 第四 道 義

次は第四編の「道義」に移つて申述べやうと思ふのでありますが、信仰編の次に道義編を撰んだことが意味の有ることとあります。或る宗教は道義と信仰は全然別な物だといふことを申して、超倫理的の

思想を鼓吹しますけれども、それは一應は信仰は倫理以上に超越するものであるが、直ぐその用は道義となつて現はれて來なければならぬのである、超倫理などといふ言葉は害あつて益なき言葉であらうと思ひます。釋尊の説き方は「信はこれ道の元、功德の母なり」と教へられて居るし、更に廣い意味に於



て道義とか徳といふことを研究すれば、信仰もやはり徳の一つである、宗教を信ずるといふことは善徳の一つである、信仰から一切の徳が生れて来るにしても、道徳といふ範圍を擴げれば、宗教を信仰するやうな気分は、儒教で言へば「真心」といふやうなものであつて、それは非常な大きな道徳の源泉をなすものではあるけれども、而もやはり道徳であるその位道徳は廣いものであるから、道義を輕んずるやうな言ひ方は、如何なる場合でもその言葉に失がある、宗教の信仰も非常に大事なものであるから、どういふ言ひ方であつても之を蔑したり傷つたりする言ひ方は、その言ひ方に癖があつていけない。道徳も何處から論じてもそれを弱らしたり傷つたりする言ひ方は、その言葉に害あつて益なきものであるこれはモウ佛敎の教訓としては非常に大事なもので、

例へば佛敎を一言にして言へばどんなものかといふことが、阿含あたりには屢々問題になつて居るが、その時には信仰とは言つて居らない。

諸惡莫作。  
衆善奉行。  
自淨其意。  
是諸佛敎。

と説いて居る「諸惡作すこと勿れ、衆の善は奉行せよ、自らその心を淨ふす、是れ諸佛の教なり」と説かれたのでありまして、この意味から言へば佛敎全體が道徳である。又一方信を絶対に解釋すれば、「信はこれ道の元、功徳の母なり」と言ひ得られるのであるから、絶對的に信を説く場合と、絶對的に徳を説く場合と、それは少しも差支へないのであるがその兩面を觀て徳の側から立論する時には、徳の絶對の方面を言ひ現はさなければならぬ。宗教家が始めから終ひまで唯だ信心を善いといつて、徳を蔑す

やうな説き方をするのはいけない、それは淨土門の人にも多いし、耶蘇敎などにもさういふとを能く言ふ者がある。そこで宗教と道徳とが喧嘩を始める、これは文明を誤る所の説き方であつて、大きな問題であるうと思ふのである。私は佛敎研究の上になつてその點に就て深く悟る所がありました、それは阿含經の要義等に委細に書いて置いたこととあります日蓮聖人の御教訓を見ますと、やはり私の感じた意味と同じ事に日蓮聖人は御指導になつて居るので、例へば「戒法門」といふ御文章を若い時分にお作りになつて居りますが、それに依りますれば、法然等が「末法は無戒であるから」と言つて道徳の側を否定してかゝるけれども、それは人々を迷はす所の教であつて甚だ宜しくない。又多く大乘の人達が五戒即ち殺生、偷盜、邪淫等を禁じた五戒といふやうな

そんなものはどうでも宜いと言つて大乘の教を説くけれども、それは大變間違つて居る、五戒を捨て、大乘の戒を持つといふ意味合は無いといふ事を説かれて居る。その五戒といふことは人間の道徳であります、泥棒してはいかぬとか、嘘を吐いてはいかぬとかいふ事は、これは印度に於ける社會道徳である、支那に於ての人倫五常といふが如きものである、人の道である、嘘を吐くとか、盜をするとかいふことは宗教の教訓ではない、人の道である。世間には有つたその社會的道徳を釋迦が打壞して、佛敎の特別なる道徳を立てたものではない、社會的道徳の根柢の淺い所に根柢を與へ、整はざる所は之を調へて行くことはするけれども、又更に偉大なる信仰をも教ゆるけれども、人間の社會生活の道徳を一點でも破壊すべき意味合は無いといふので、それ故に之を



「根本業」と言つて居る。佛教徒でも誰でも、人間として世の中の徳を守るといふことはこれは根本に極つた問題で、之を少しでも疵を附けるのはいかぬといふ事を釋尊は論じて居るといふことが「戒法門」の中に書いてある、これは非常に大事な議論である。假令哲學をやらうが大政治家にならうが、所謂社會の常識的に極つて居る道徳を壞はすといふことはない、如何なる倫理學者に成つて學問研究をするからと言つても、それは丁度三輪執齋先生が「自分は親孝行や禮儀道徳の研究をする爲ではあつたが、それが爲に實際親孝行を忘れて居つたことは相濟まぬ」といふことを書いて居るが、意味の深い事だと思ひます。どんな善い事を研究するからと言つても、實際に行つて行かなければならぬ所の道徳を疎外してかゝつたならば、後に後悔しなければならぬこととて

あります。

日蓮聖人の行ひの上に就て言へば、國家には忠義の働きをし、親には孝行、弟子をば愛するといふやうな、總ての人間としての行ひの光が、日蓮の一代に洵に鮮かに現はれて居る次第である。「俺は坊主になつた者だから親孝行のことなどは知らぬ」とか「俺は大きな考でやつて居るのだから友達のことなど心配しなくても宜い」といふやうなことは言はない、非常な大きな理想を懷いて奮闘しつつも、而も一般の世の中に尊重せらるべき道徳に就ても光を現はして行つて居るのであつて、そこが大切な所である。壽量品の教訓に於ても釋尊の活動をば「諸の善根を生ぜしめんと欲して」と説かれて居りますから、諸の善根といふ中の「信根」といふのは宗教の信仰であります、諸の善根と總括した時には宗教の信仰も

善の中に入つてしまふ。併し何が源になつて行くかと言へば、信を本にして諸の善が發育するといふ教訓が起つては来る、けれども廣い思想で論ずる場合に廣く道徳と言つたならば、宗教の信仰をも包括するのである、今のやうに道徳と宗教を別けてしまつて、道徳の方に於ても信仰は無いものだといふやうな言ひ方をするのは、大きな間違であるし、又信心は道徳を超越して居ると言つて威張り倒すのも間違つて居る。人間の廣い意味の道徳といふものの中には無論信仰がある、例へば日本の國民道徳と言へば忠君愛國の道徳であるけれども、敬神といふことがその本をなすのである、儒教で言へば仁義忠孝が道徳であると同時に、天道を畏敬することが道徳である。さういふ意味を明かにして日蓮主義者は、信仰の大切な事と同時に、道徳の尊とさを重んじて實行

して行かなくてはならぬと思ひます。それ故に信仰に就いて道義編を擧げたのであります。

二九、法華取要鈔 此の土の我等衆生は五百塵點劫より已來、教主釋尊の愛子なり、不孝の失に依つて今に覺知せずと雖も、佗方の衆生には似るべからず、有縁の佛と結縁の衆生とは譬は天月の清水に浮ぶが如く、無縁の佛と衆生とは譬は聾者の雷聲を聞かず盲者の日月に向ふが如し。(遺一〇三八)

この「法華取要鈔」の文は、我等は五百塵點の古より釋尊の愛子であつた、それが親不孝の失に依つて今に吾が精神の親である釋尊を忘れて居るけれども、併ながら子が親を忘れたからと言つて、親は子



を捨てるものではない、世の中には多く親を忘れた子供があるけれども、併し親はその不孝なる子供と雖も之を捨てない、その通りて我等は釋尊の愛子であつて釋尊を忘れて居つても、釋尊の慈悲は少しも吾等を離れては居ないのである。殊に有縁の佛とその縁を結んで居る衆生との關係、これは絶對から言へば十方の衆生みな釋尊の愛子であるけれども、又その中から結縁といふことに移つて來る、即ち之は第二段の議論で、壽量品の思想では無くして化城論品の思想である、大通の十六人の王子、三千塵點劫以來の事に就ても娑婆世界に縁有つて釋尊は娑婆世界の教主となつた。その關係は恰かも天月が清水に浮ぶが如きもので、洵に不思議な因縁關係を以て長い間我等は釋尊と結びついて來て居る、縁有ればこそ吾々も娑婆世界に生れた、釋尊も娑婆世界に出現

して下さつたので、この關係を想うと容易な間柄ではない。又縁の無い佛と縁の無い衆生は、それは恰かも雷が雷を聞かないとか、盲者が日月を觀ないといふやうな譯で、感應を起さないものであるけれども、吾々と釋尊は水と天月の如きものであつて、直ちに感應を起す、月が先きに出たか水が先きに在つたかといふことは判らぬ、月出れば必ず水が在つて同時にそれに映るといふ、そこに前後なく關係を起して來るのであるから、この本佛の慈悲に感激すべきことを教へて居るのであります。これは前にも申す通り儒教で申せば天道を畏敬する、日本で言へば敬神の觀念といふ所から一切の道德が導かれるので吾々日蓮信者は佛から導かれ、又徳の淵源は「本佛の愛子なり」といふ自覺に基くのである、これは信仰の教訓であるけれども、私は特に之を道義篇の第

一に摘出して置いたので、私としては意味深き抜き方であると考へて居るのであります。

信仰と實行とがどういふ風に導かれて居るかといふ事を教へて居るので、「この經は——」茲て言へば無

三〇、開經 是の經は本と諸佛の室宅の中より來り、去つて一切衆生の發菩提心に至り、諸の菩薩所行の處に住す善男子是の經は是の如く來り是の如く去り是の如く住し給へり、是の故に此の經は能く是の如き無量の功德不思議の力あり、衆生をして疾く無上菩提を成せしむ。

量義經であるが、開顯すれば法華經であつて、法華經を我等が信ずるといふが、その法華經は何處から出て來るかといふと、本は諸佛の室宅の中から現はれて居る、その諸佛といふことも壽量品に依つて開顯すれば本佛である、分かつては諸佛であるが統一すれば本佛である。室宅といふことは「慈悲を以て室と爲す」といふので、この我等の信ずる南無妙法蓮華經は、本佛の大慈悲の胸の中から起つて來たものである、さうしてそれが何處に行くかといふと、この

開經即ち無量義經の文は、唯今私がいふ意味を一層明かに順序を説明されて居ることであつて、前に「法華取要鈔」に於て現はれて居る精神が、更に明晰に順序立てられて居る經文である。即ち我等の

尊とい釋尊の慈悲の結晶から出た妙法蓮華經は、我等衆生の菩提心に至るのである、この發心といふことをしなければ、その尊とき妙法はその人の手に入らないのである。菩提心とは、どうぞ自分は無限の



向上を辿らう、自分にも佛性があり、偉大な佛にもなり得られるといふ事を聞いて是れば、日々の仕事は仕事としてやるけれども、最後の最後は自分の有つて居る無限の光を現し、無限の生命を現し、佛と同じ絶対の境界にまで進み行かなければ、我等の理想が満足するものではないといふので、非常な大精神の自覺を有つたのが菩提心を起すといふこととである。下に向いては親切な心になつて大勢の者を助けやうといふ利他の菩薩行となつて現はれて來るが、上に向つては佛に成らうとする所の大向上心である。その大向上心が發現した其處に、この慈悲の中から出て來て引つくだのである、であるから佛の慈悲と我等の發心とである、前に申した我等の渴仰の心が佛の慈悲と結びついて、そこに一切の行ひが導かれて行くのである。そこで「諸の菩薩所行の處

に住す」であつて、何處に留つて居るかと言へば、その發心から發動して居る所の菩薩行を實行しつゝある所に留まる。菩薩行とは先づ第一親切の行ひを以て、誰でも助けてやらうとか救はうとか、世の爲め國の爲め人の爲めといふやうな、所謂今日の言葉で言へば社會奉仕の事業であるとか、或は忠君愛國の行爲であるとか、人道的の行爲であるとかいふやうな事から、その他一般の社會事業、宗教事業すべて公判公益の爲めに成る事柄が皆菩薩行である。さういふ諸の菩薩行をやつて居る其處に活きた法華經は存在して居るのである、決して箱の中にあるものでもなければ、袋の中にあるものでもない、活ける法華經とは生きた本佛の慈悲の中から來て、生きた菩提心の所に至つて、さうして活動せる菩薩行の其處に存在して居るものである。そこでこの發心とい

ふ信仰が直ぐに菩薩行といふ道徳を生んで居るのであつて、發心と菩薩行の離れない事、その本に佛の慈悲が輝いて居る事が、この經文の何處から來て、何處に行つて、何處に住まるといふ來、至、住の關係に於て明かになつて居るのである。さうして「此の經は能く是の如き無量の功徳、不思議の力あり、衆生をして疾く無上菩提を成ぜしむ」と説かれて居るが、海に能く整うた教訓であります。

宗教は何も澤山の事が要るのではない、これが西洋のバイブルか何かにあつて、斯ういふやうな教訓を基督が言ふたとかいふことになれば、實に偉大な力を以て歐米の天地に影響を與へたであらうと思ふのであるが、餘りに佛教は善い事が澤山あり過ぎるものであるから、大金持の子息が十圓金貨を粗末にするやうな譯で、實に善い事はかりあるものであ

るから、それを發揮することが出来なかつたのである。これだけの經文の意味と雖も、之を縱横無盡に活躍せしめたならば、非常な効果が人生に現はれて來ると私は信ずるのであります。逸も學校をやつて居る所の倫理教育の面倒な理窟を控ね廻して居つたり、卑近な實例を擧げて居つたりするのは違つて非常に意味深く本當に人格を造る所の教であると思ひます。

三一、開經 第一に是の經は能く菩薩の未だ發心せざる者をして菩提心を起さしめ、悲仁無き者には慈心を起さしめ、殺戮を好む者には大悲の心を起さしめ、嫉妬を生ずる者には隨喜の心を起さしめ、愛著ある者には能捨の心を



起さしめ、諸の慳貪の者には布施の心を起さしめ、憍慢多き者には持戒の心を起さしめ、瞋恚盛んなる者には忍辱の心を起さしめ、懈怠を生ずる者には精進の心を起さしめ、諸の散亂の者には禪定の心を起さしめ、愚痴多き者には智慧の心を起さしめ、未だ彼を度すること能はざる者には彼を度するの心を起さしめ、十惡を行ずる者には十善の心を起さしめ、有爲を樂ふ者には無爲の心を志さしめ、退心ある者には不退の心を作さしめ、有漏をなす者には無漏の心を起さしめ、煩惱多き者には

除滅の心を起さしむ、善男子是を是の經の第一の功德不思議の力と名く。

これもやはり無量義經の續きの文でありまして、その信仰は如何なる道德的行爲を生み出すかといふことに就て、それを分解して内容を説明した經文であります。十種の功德を説いた最初の一種として之を擧げてあるのて、第一の功德力としてもそれ程澤山のものが現はれることを説いて居る。これは一々講ずる迄もなく、この經の信仰に入つて菩薩行に進む者は、菩薩が未だ發心して居らぬければ、この教を聽きこの教に觸れる時菩提心が發つて來る、發心とは前に言うたが如く菩提心を起し、上には佛に成らうとし、下には人々を救はうとするやうな、大きな無限的向上とそれから利他の精神をいふ、即ち向上と利他を菩提心といふのである。隨つて慈悲心が

足らぬ者はさういふ心が起るやうになるし、殺戮な人間はその癖が直つて優しい心の人になり、嫉妬心の燃えて居つた者は隨喜の心となつて、人の善いことに賛成を表するやうな善い氣分になつて來る、愛著に溺れて居つた者は思ひ切つて心の囚はれから離れて執著といふものが無くなつて、詰らぬ事に煩悶することが無くなる。又慳貪の者は布施の心を起し、憍慢の者は持戒の心を起し、瞋恚の者は忍辱の心、懈怠の者は精進の心、散亂の者には禪定の心、愚痴の者には智慧の心、他を救ふ精神の無かつた者には利他の精神が動いて來る。又十惡と言つて殺生、偷盜等の十種の罪惡に溺れて居つた者が、その反對にさういふ事を犯さないやうな十善の心に赴いて行く有爲を樂ふと言つて、その日々に消え去つて行く所の物質的生活に居つた者が、無爲といふ精神的の

生活に入つて行く。さうして善い事に直ぐ轉退をした者が不退の心を起し、理想に活きて如何なる困難にも逃げ出さないやうになつて行く。有漏といふ一時の智慧に導かれて居つた者が、さうでなくして非常に根柢深い所の智慧から心の方針が立つやうになつて來る。煩惱多くして様々なる迷ひに居つた者がその煩惱が除かれて淨い精神になる。さういふ事柄の全部を集めて之を第一の功德といふので、それから續いて九種の功德が擧げてありますが、これ程のお經には廣大な功德があつて、その全體が道德的であることが能く判るのであります。唯だ有難主義のものでもなければ、死んで佛に成るといふものでもなければ、病氣が癒るといふやうなものでもない、眞に人格の缺點が除かれて來るものである。

これはこのお經だけで言うて居ることかといふと



斯ういふ工合に並べたから數多いやうであるけれども、纏つた言葉としては「四無量心」及び「六波羅密」、それからあと普通に言ふ所の「十善」、それから「無爲」とか「不退」とか「無漏」とか「煩惱を除く」とかいふことは、佛教の定説で、何處でも説いて居る事である、何處でも説いて居る事を茲に並べただけで、何も珍らしい事はない。四無量心といふのは「慈悲、喜捨」といふのであるから、慈心無量者には慈心を起し、殺戮の者は大悲、嫉妬の者は隨喜、愛著の者は能捨といふ、この慈と悲と喜と捨といふ四つを四無量心といふ。それから次の布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧といふのはこれは六波羅密である。それから十善は前に言うたやうな譯で、要するに茲に擧げてあるいろ／＼の徳は、四無量心、六波羅密、それから無爲、不退、無漏、煩惱

除滅といふやうな事は、佛教の常談として如何なる所でも言ふ事である。それが法華經の信仰の中に於ては斯ういふ力を現はして來るといふことを説かれた、整頓して説く所が法華經の長所であるけれどもこれは今迄無かつたものを突然言ひ出すのでなくして、釋迦は小乗の始めから涅槃の終りまで、我が教ゆる信仰には斯の如き道德的色彩が發揮して來るといふ事を力説して居る。佛教は全く道德的教化である、四無量心とか六波羅密とかいうと、「著薩行ナンてそんな難かしいことは逆もいかん」と言つて、法然や親鸞が威かすから變になるけれども、「懈怠を生ずる者には精進の心を起さしめ」といふのは、ノラクラ者が働かすといふのだから、皆必要な教化である。餘り一般大乘家が菩薩行を高い所に持ち上げてしまつて、「逆も及ばぬ、逆も駄目だ」と言つて、

何にも無しの空っぽにしてしまふといふ遣り方をした、これは非常な間違ひである。全部出来なければ一部分で宜しいと釋迦は説いて居る、實にその説き方といふものは、やれなければ「やらう」といふ氣分だけでも宜しいといふ位にして道德心を鼓舞して居る。それは孟子が教へてもやはり同じであつて「寡人は色を好む」といふやうなことを言へば「色を以て賢に易へよ」とか、或は穀糠として牛が死地に就くのを憐れんで、羊を以て易へよと言つた、牛は大いから損だ、羊の方か小さいから徳だ」と思うたのではない、穀糠として罪無くして死地に就くが如き態を憐んだのであると言へば、「然らば仁禽獸に及んで何ぞ人を憐れむことが出来ないか」といふやうな、實に啓發的の教訓を與へた、これは教化として非常に大事なことである。それを感かしてしまつて

「逆もお前にそんな事が出来るものぢやない、人間は罪惡の塊りぢや」といふやうなことを言ふのは非常な間違ひである。今日の思想問題でも「逆も物質的でなければ人はいかん」といふ聲ばかり高くする、物質は必要であつても、さう誰も彼もが唯だ物質物質と言へば、遂にその弊に堪えざるに至るものである。實際精神の事は中々得悪いけれども、それを善導啓發するが人生に於ては非常に大事なことで、教が必要だといふことはその啓發を指すのである。その啓發する所の手綱を切つてしまつて、逆も駄目ぢやと言ふのは、孟子の謂ふ自暴自棄で非常に悪い事である、やらぬ迄もやつて見やう、死の利那までやらうといふ、道德的向上心を養成するが、教化の方針でなくてはならぬ。

三二、法師功德品 諸の所説の法其の



義趣に随つて、皆實相と相違背せじ、若し俗間の經書、治世の語言、資生の業等を説かんと皆正法に順ぜん。

この法師功德品は、法華經の思想は世間の左様な道徳なり、尙ほ廣くは實際の生活までも調節を取つて行く所の教である事を説いて居る。道徳といふことも實は廣く言へば倫理ばかりではない、商賣に勉強するのも道徳である、廣い意味に於て言へば生活全部が道徳化して、道徳的生活になるのであるからその意味から言つてこの法師功德品の教訓なども非常に善い事である。法華經の眞意義に徹底した時には、その説くことが政治上のことであらうが、道徳上のことであらうが、一般生活の問題を捉へても、その事柄が皆法華經の絶對眞理と一致して居つて、決して離れるものではない。活ける法華經といふの

「さか」と日蓮の言ひし所である。偉大なる道徳といふものは、今の文明のやうに道徳と宗教を分離してしまつたり、又道徳と經濟を分離して終つたりするやり方は、これは遣り損ひのことであつて、渾然としてそこに統一があつて——岐れて働く時分にそれぞれ領域が違つて、此處からが政治の領域、此處からが經濟の領域といふことはあつても、その、モウ一つの奥の大精神に於ては、大政治家が考へて居る事も大經濟家が考へて居る事も、大宗教家が考へて居る事も、大なる理想に於ては國民みな一致したる精神が無くてはなるまいと思ふ。億兆心を一にして世々厥の美を濟す」その徳を一にす」と陛下の仰せられたのはそれである、法華經を一乘の教といふのもそこにある、日蓮が「立正安國論」に「信仰の寸心を改めて實乘の一善に歸せよ」と言つたこの一善とい

は今の所謂宗教的事ばかりをいふのではない、あらゆる方面の事柄が皆法華經となつて行くのであるから、若し例を引いて見るならば、「俗間の經書」即ち世間で言うて居る所の道徳上の書物に書いてある事、所謂「勅語」とか「論語」とか「大學」とか、或は學校で今用ひて居る所の倫理書、修身書といふやうな物、それがやはり法華經と一致する譯なんである。又世の中を治める所の語言、政治法律、又「資生の業」——生を資くる所の所謂殖産興業、又「等」といふ字に於てその他の一般の生活を收めて居る、道徳と政治と經濟と主なるものを擧げて來て、それから「等」といふ字に於てあらゆる人生活の全部を包括して、それ等が皆法華經の教と順應一致して行く所のものである、それが一乘の教である。天晴れぬれば地明かなり、法華を識る者は世法を得べ

ふのも、先帝陛下が「徳を一にせむことを庶幾ふ」と仰せられたのも、皆同じ意味である、それを今日は忘れて居る。それであるから經濟上の議論から言へば勝手な事を言つて道徳を傷けたり、又宗教の議論から行けば宗教の都合の好いやうな事を言つて、世の中を破壊するやうな事になつたり、これ等は皆出来損ひである。この法華經の理想が總べて實相と相違背せずして、根本の大理想に於て統一を示したといふことは、文明を導く上の根本原則となるべきものである、其處に大きな道徳がある。

三三、四恩鈔 佛法を習ふ身には必ず

四恩を報すべきに候か、四恩とは心地觀經に云く、一には一切衆生の恩、一切衆生なくば衆生無邊誓願度の願を發



し難し、又惡人無くして菩薩に留難を  
 なさずば、いかてか功德を増長せしめ  
 候ふべき、二には父母の恩、六道に生  
 を受くるに必ず父母あり、其の中に或  
 は殺盜、惡律儀、謗法の家に生れぬれ  
 ば、我と其の科を犯さざれども其の業  
 を成就す、然るに今生の父母は我を生  
 て法華經を信ずる身となせり、梵天帝  
 釋四大天王轉輪聖王の家に生れて、三  
 界四天をゆずられて人天四衆に恭敬せ  
 られんよりも、恩重きは今の某が父母  
 なるか、三には國王の恩、天の三光に  
 身をあたため地の五穀に神ひを養ふこ

と、皆是れ國王の恩なり、其の上今度  
 法華經を信じ今度生死を離るべき國主  
 に値ひ奉れり、争か少分の怨に依つて  
 おるかに思ひ奉るべきや、四には三寶  
 の恩、釋迦如來無量劫の間菩薩の行を  
 立て給ひし時、一切の福德を集めて六  
 十四分と成して功德を身に得給へり、  
 其の一分をば我身に用ひ給ふ、今六十  
 三分をば此の世界に留め置いて、五濁  
 雜亂の時、非法の盛んならん時、謗法  
 の者國に充滿せん時、無量の守護の善  
 神も法味をなめずして威光勢力減せん  
 時、草木根莖枝葉華果藥等の七味も失

はん時、十善の國王も貪瞋痴をまし父  
 母六親に孝せず、したしからざらん時  
 我が弟子無智無戒にして髪ばかり剃り  
 て守護神にも捨てられて、活命のはか  
 りごとなからん比丘比丘尼の命のささ  
 へとせんと誓ひ給へり。(遺四二一)

次に四恩といふことはこれは佛教の定説であつて  
 佛教を習ふ位の者は必ず四恩を報しなければならぬ  
 その四恩といふことは「心地觀經」にも説いてある  
 が、他の「大薩遮經」などにもある、大體は阿含の  
 中からもこの恩といふ觀念は説かれて居るので、こ  
 れは釋迦が唯だ一時のお経で、思ひつきて言ふので  
 はない、報恩の道德といふことは佛教を一貫して居  
 る所の大主義であります。それを先づ茲に心地觀經

をお引さになつて、衆生の恩、父母の恩、國王の恩、  
 三寶の恩といふことを詳細にお述べになつた、この  
 中に殊に注意すべきは國王の恩を説かれる言葉の下  
 に「天の三光に身をあたため、地の五穀に神ひを養  
 ふこと、皆是れ國王の恩なり」とお説きになつた、  
 これは如何にも善い説き方で、今の思想の紊れから  
 言へば、天の三光に身をあたためたりするのは、こ  
 れは自然に親しむ生活で國家の御恩になる譯ではな  
 い、お日様は直接我等を照して下さるのである、野  
 に生へた穀物は天の方から貰つたか知らぬけれども  
 國には關係が無いといふやうな風に考へて、所謂ト  
 ルストイの田園生活の如き、或は社會主義者の國家  
 を否定する議論の如き孰れも左様な事を言つて居る  
 が、併しこの國家の恩があればこそ穩かに天の三光  
 にもあたためられて居るので、これが國が亂れ秩序



が案れれば、露西亞の如きは現に天の三光に身をあためめる事も出来なくなつて居る、家庭は破壊されてしまひ、若い女は掠奪されてしまひ、何處で自分の親が死んだか、子供が死んだか分らぬといふやうな事になつてしまふ。營養が不足であるから生れた子供が爪が無いといふやうな話も聽いたりします。が、そんな事になつてしまへば決して生育すること出来ないのであるから、吾々が安全に生活して天の三光に身をあためめるのも、是れ皆國王の恩なりといふ程に、自然より來るものをも國王の恩に歸して説明されたのは、如何にも徹底して居る事であります。又そこに法華經を信ずる宗教の喜びも國王の御陰であつて、國家の保護の中にこれが信ぜられることをお説きになつて居る如き、その他四恩の説といふものは、皆非常に有難い意味でありまして、私

共は屢々その思想に感激をして居るのであります。それは度々他の場合にも説いてあることでありますから、唯だこの御遺文に於て整ふたる教訓のある事を知りさへすれば、講釋としては多く言ふ必要もなからうと思ひます。若しお經に就て調べるならば大薩遮經と心地觀經、それから阿舍の報恩に關する方面等を併せて研究すれば宜いと思ひます。

三四、立正安國論 夫れ國は法に依つて昌へ、法は人に因つて貴し、國亡び人滅びなば佛をば誰か崇むべき、法をば誰か信ずべきや、先づ國家を祈つて須らく佛法を立つべし、又云く、國を失ひ家を滅さば何れの所にか世を遁れん、汝須らく一身の安堵を思はば先づ

四表の靜謐を禱るべきものか、又云く汝早く信仰の寸心を改めて實乗の一善に歸せよ、然らば即ち三界は皆佛國なり、佛國其れ衰へん哉、十方は悉く寶土なり寶土何ぞ壞れん哉、國に衰微なく土に破壊なくんば、身は是れ安全にして心は是れ禪定ならん、此の詞此の言信すべく崇むべし、又云く、速に對治を回らして早く泰平を致し、先づ生前を安んじて更に没後を扶けん、唯だ我が信ずるのみならず又他の誤を誡めんのみ。(遺三八〇—三九四)

この「立正安國論」は、四恩の中から特に國家の

方面を抜き出して來たので、同じ四恩を説いても國家の側を軽く見てしまふと非常に間違つて來る譯である、各宗の坊さんが四恩を言ふやうだけれども、國王の恩を力説する點に力が足りない、日蓮聖人は國は法に依つて昌へて行くものであり、その法は又人に依つて貴きものである。それから法と國と人の關係を忘れてはならぬといふので、非常に人格を重んじて、教は人に依つて弘まり、人に依つて滅びる、その教の如何に依つて國の盛衰があるのであるから、教化に當る所の人を重んじなければならぬ、これは日蓮が日本の柱である、日蓮を失ふ時日本の國は滅びると迄言つたので、非常にそこには確信を言ひ現はして居られると思ふ。今の日本の平凡な人は、第一教化に當る人ナンといふやうな者は無用の人間かの如く考へて居るから、そこに善い宗教家



が出て来ないのである、不要な者が宗教の事などに携はるやうに考へて居る。亞米利加あたりの話を聞いても恐るべき状況であります、一つの州に於て四千も五千も教會が空いてしまつて、宗教家の候補者に成り人がないといふやうな事であれば、これも早晩露西亞の覆轍を蹈むのではなからうかと實は心配する次第であります、教會があつても其處に入る牧師が無くなつてしまつて、何でも大きな教會の二箇所か三箇所は坊さんが居るけれども、あとは皆蜘蛛の巣が張つて居るといふやうな事になつては、如何に亞米利加が物質的に榮えても、その前途知るべきものだらうと思ふ。日蓮聖人はその點を慨嘆せられて、非常にこの法と人と國との關係を重んぜられたけれどもそれは法が大事、人が大事だからと言つて國を忘れた法や人が幾らあつても役に立たない、國

家が滅亡すれば佛法何れの所に存立するか、故に先づ國家を祈つて而して佛法に力を盡すといふことになければならぬ、茲に國家本位の觀念を明かにしたのであります。總べて茲に書かれて居ることは、思想が能く整うて居ると思ひます。

それから「信仰の寸心を改め」といふことも實に大切な思想であつて、「寸心」といふのは考の小さい事をいふのであらうと思ふ、前にも言つたやうに倫理と宗教が違ふとか、又道德上の問題でも西洋の新しい思想は善い、日本の舊思想は悪いとか、又舊思想に閉ぢ籠つて新思想を呪ふといふのは皆寸心の人達である、新しい方にも輕卒な事が澤山あるけれども、舊い方の頭腦も實は頑固なものが多い、それはもう實に其處には何方が悪いとも善いとも分らぬ位、病弊の多いものであります。さうして一面にその反抗

心が起つて来る、是れ皆信仰の寸心であつて、小さな考が衝突をして「實乗の一善」といふ堂々たる所謂文化を大成統一するといふ思想が無い、文化を分裂せしめてその一角に閉ぢ籠つて相争ふやうな、所謂思想上に於ける群雄割據であつて、そこに内亂が断えぬのである、即ち日本の元龜天正時代の有様のやうに思想界がなつて行く。日蓮はそれを嘆くが故に、太閤秀吉が出ててその群雄を統一したやうに、思想界に於て大成統一をやらうとしたのが「實乗の一善に歸せよ」といふことである。さうさへなればこの世の中は決して衰へるものではない、「三界は皆佛國」である、この佛國といふ事も非常に尊とい意味であつて、日本は一方から言へば神國であるけれども、それは小さく考へた言ひ方である、もう一つ大きな範圍を考へたならば、宇宙は皆佛國である。

之を顛倒して佛様を日本の國家の中に入れて、國家の神よりも小さいやうに考へたり、宇宙を日本よりも小さいやうに考へたりして居る事は間違ひである三界といふことは宇宙である、宇宙は皆佛國であるだから三界の中の日本も皆佛國である、その三界を支配するものが佛である。之を顛倒して佛は日本の居候なりといふやうな風に考へたならば、日蓮主義ではない、物部守屋式の觀念である。日蓮聖人は日本の神を尊敬せられるけれども、それは日本の神様としてである。三界は佛國である、佛國それ衰へんや、これは唯だ日本ばかりが衰へないといふのではない、世界は皆佛國として本佛を奉ずる時、何れも皆實士であるといふ、洵にこの教訓がよく整頓して居ると思ふ。さうして人々を助けるには先づ生前を安んじて更に没後を扶けるのである、單に死んでか



らばかりではない、生きた現在の安寧幸福を保全して、而して死後永遠を扶けて行くので、そんな事はもう論ずる迄もないことである。これはもう佛教の原則である、未來觀の宗教とか、現世教とか、不動さんのやうに火事だけ守るとか、阿彌陀さんのやうに死んだ者だけ迎ひに来るとかいふやうなことは、實に低級なる思想である。そんな事は宗教でなくても一人の人間が本當に考へたならば、親が子を思ふのには「どうしても彼が生存の間には幸福なる生活

を送るやうに、さうして人間の生命は滅くならぬが、今度生れ代る時分にも地獄などに行かぬやうに」といふことは、親の愛が子供に及んだ時でも考へる、況んや神とか佛とかがその慈悲が圓滿に働かないといふのであれば、神佛といふことは言へないであらう、「先づ生前を安んじて更に没後を扶けん、唯だ我が信ずるのみならず、又他の誤を誡めんのみ」この言ひ方は極めて能く整うて居ることと思ふ、茲に國家本位の道徳が力説された次第であります。

## 世界に於ける日本の地位

法學博士 山田三良

併ながら斯の如きことは一朝一夕には出来ないうこととあります、殊にこの事は教育或は政治といふや

うな事だけでは到底出来ないうこととありまして、人間を人間として完全にするといふことは、結局宗教

の變化に俟たなければならぬのであります、宗教に基き信念に依り、偉大なる美力に感孚して、自らその信條に従つて生活するといふことになつて、始めて人間が人間として人間たるべきことを行ふことが出来る状態になるのであります。然るに明治維新以來今日まで、我國に於ては教育は宗教を度外して居つて、學校と宗教とは全く別物となりまして、學校の先生は宗教の信仰を語ることを禁ぜられて居るやうな次第でありました。故に諸君の如き善根を有して居る方は、斯ういふ場所にお集りになつて、信仰的生活に憧憬れてお出になれますけれども、滔々たる社會に於ては「この好い日曜に何て統一閣などに行くものか、馬鹿者め」といふ人が澤山あるのであります。そういふ人が天下に一バイ居るのでありますから、どの方面を觀ても洵に恥かしい状態が充満して居るのであります。政治の上にも明治天皇の「萬機公論に決す」と仰せられたことは、維新以

來唱へられて居りますけれども、併し日本國民は今果して「萬機公論に決し」て居るかといふと、萬機公論にあらざして私論に依つて決せられて居るのであります。多數といふ事が必ずしも本當の日本國民の多數にあらざして、或る組織、或る機關による所の多數が、敢て國民の多數といふ名を冒して居るのであります。これは何も政治上の事ではない、社會上の事も總べてその通りであつて、一概に多數が必ずしも善いといふ事ではない、多數の主張する所であつても、少數の主張する所であつても、道理が世の中に行はれる時代を實現しなくては、人間として生甲斐のあることではないのであります。随つてこれが政黨の多數の勢ひであらうが、貧乏人の多數の勢ひであらうが、勞働者の多數の腕力であらうが、多數といふ事のみが專横を働くといふは、爲すべからざることであつて、多數意志の眞價は、道理に適つた、即ち正義公平を實現する意味に於てなくては



は、公論とは言へないのであります。これが未だ實現せられて居ない我國でありますから、我國の總ての弊害、社會的政治的の弊害は、實に一々列擧することの出来ない有様であります。現に東京の市政の如きであつても、今日環亂の状態ではありませんか、斯の如きものに依つて政治を行はれながら、黙つて居る市民自身も亦實に馬鹿氣で居るものであると言はなければならぬ。然るにさういふ馬鹿氣た事でも自分一人先きに立つて之を主張すれば、世の中に嫌はれるとか、或は迫害を受けるとかいふことから、妥協的姑息なる精神に流れて、「マア難かやるならう」斯ういふやうになつて打ちやつて居るといふのが、日本の今日の狀態であります。これは洵に利口な遣り方である、併しこの利口といふことが實に人生を腐敗せしめ墮落せしむる本であります。宗教の信仰は決して利口になることを教ゆるものではない一方から言へば潔癖な程に信條に厚く、さうして己

れの主義主張、己れの理想を實現すべく生きるといふ生き方を教ゆるものである。我國に於て斯の如き妥協的氣分が漲つて居るのは、言ひ換へれば「國民の間に信念の無いことを示して居るのである。信念あり信仰ある國民であつたならば、決して斯の如き状態を坐視して居ることは無い筈であります。」さうなつて來ますと、我々は宗教に依つて生きなくてはならないことを、直ちに感して來るのであります。併しそこに又困難なことは、宗教といふものは一方から見れば實に難かしい事であり、信仰は甚だ得易いやうなものであつて中々得難いものであります。お互ひに信仰を繼續する事すら中々容易でないのである。釋尊の教の中には三千年の間も海の底に居眠りをして居るやうな貝のある事を説明してあります。三千年は愚か、始無き始より今日に至る迄未だ信念に生きることが知らない人は眞に眠つて居る人間ではありませぬか。さういふ三千年……何萬

年といふ間眠つて居る人間が、世の中に充滿して居るのであつて、その信仰の眼が醒めるといふだけすらも出來難いこととありますから、その難い事はまるで一眼の龜が海に漂ふて浮木に遭ふやうなものであると説かれて居るのも、無理からんことであらうと考へます。偶々吾々が諸君と供に信念に生きたいといふ事に眼醒めた所で、どの宗教が一番宜しいかどうかといふ信念が正しい信念であるかといふ事になると、甚だ困難であることは、唯今本多現下が説かれたやうなものであります。他の宗旨のみならず日蓮宗といふ信仰を持つて居るお方の中であつても、正しき信念に生きて居る人は極めて少なくして、多くは正しからざる信念に陥り迷信に陥つて居るといふことは、唯今お説きになつた通りであります。これは甚だ残念なことであります。相場師や藝妓が穴守稻荷などに參つて、鳥居などを建てると言つて僅かのお錢を上げて、金が儲かるやうに、或はよい御利

益を得るやうにと祈つて居る所を見ると、所謂蝦蟇を釣るやうなものであります。さういふやうに信仰を營業的、計算的に考へて居るやうなことが、低級なる信念の中には行はれて居ると言つて笑つて居る人もありますけれども、現に日蓮宗であつて法華經を信ずる人の中にも、甚だ遺憾ながらさういふ人が少なくないのであります。併し法華經には何とお説きになつて居るかといへば、  
一心に佛を見たてまつらんと欲して自ら身命を惜まず。  
此の佛を見たてまつる爲には命すらも惜しくはないといふことにならなければ、本當の信念では無いと説き明かされて居るのであります。して見れば病氣が癒るやうにとか、金が儲かるやうにとか、或はよき物質的幸福を得るやうにとかいふことを第一に願ふといふことは、抑々佛に對して冒瀆であり、佛はさういふやうに身體を大事にしるといふこ



とは何處にもお説きになつて居らない、自分の身體からだを粉にしても、命を捧げて佛に値ひたてまつり、佛の思召に従つて生活しろといふ事をお説きになつて居る。さういふ信念が未だ徹底して居らないといふ事は、日蓮宗と雖も餘り威張つて云ふことが出来ない有様であります。さういふ譯でありますから、本當に信念を人に與へて、正しき信念に生活せしむるといふことは、容易に出来難い事があります。

併しさういふ事は何か導かれるものが無くては得られないことでありまして、どうしても此の統一關のやうな道場に參つて、佛に近づき佛説を聴き、それを理解し、それに頼るといふやうに修養を積んで始めて得らるべきこととありますから、私も時間の許す限りは斯ういふ所に集つて、諸君と共に信念を増進せんことを希望するのであります。中々それが容易に出来難い事でありまして、お互に信念に志しながらその正しき信念を實現することが覺束なく

なつて居るやうな次第であります。併し今年の如く日蓮聖人の御降誕七百年に當つて統一關が斯の如く擴張せられ、その擴張せられたる統一關に常に溢るゝばかりに諸君がお集りになつて、茲に日蓮主義の正しき意味を研究し、それを互ひに練磨して信念の上に實現せしむるやうになるといふ事は非常に喜ぶべきことであつて、私共この道場に於て多少の理解を得たる者としては、何とも言へない歡喜の心に打たれるのであります。

併し斯の如き會堂が出来るといふことは、畢竟するに外形に現れたるだけの事でありまして、左程に喜ぶべき事でも無いのであります。又吾々が日蓮聖人の教に従ひ、日蓮聖人の教に入つたといふとは大變喜ぶべきことではありますけれども、今申したやうにお互ひが如何様に日蓮主義を理解して居るか、自ら省みて日蓮主義に適ふやうな生活をして居るかといふことを考へますと、甚だ不安の念に堪へない

のであります。故に私が諸君に希望する事は、日蓮主義を世の中に宣傳し又一圓浮提にも之を擴げて行かねばならないといふ運命があり、又その機運に向つては居るのであります。この際お互ひとしては何を第一に爲すべきかといふと、自ら省みて自分自身に、日蓮聖人の主張せられたやうな四箇格言といふものを、自分自身に當てて見ることが第一の急務ではなからうかと思ふのであります。吾々が多少の日蓮主義の理解をして、直ちに大きな顔をして日蓮聖人の教こそは世界第一の教であるといふ事のみを主張して、信仰を人に押賣するやうなことになるならば、これは日蓮聖人の思召に適はないのみならず、日蓮聖人の教を潰すことになると思ふ。又日蓮聖人の教に入つて居ると言ひながら、眞の信仰がその人の日常の生活に現れて居らないといふ事になれば、それは所謂「論語讀みの論語知らず」といふことになるのでありますから、自分の身に之を行ふといふ

事を第一に注意するが肝要であらうと思ふ。日蓮聖人は「如説修行」といふことを力説せられたので、法華經の教の如くに修行する、その行といふ事に重きを置かれる點に於て、聖人の教は生きて居るのであります。吾々が日蓮聖人の教を信仰する以上は、自分の身に省みて願くは日蓮聖人の如くにありたいといふことに努力しなければならぬ筈であります。然るに自分の爲す事と自分の言ふ事が違つて居るといふやうな人が、日蓮主義を宣傳するといふことに於ては日蓮主義の信仰を得た人は直ちに不借身命といふやうなことになるつて、命を捧げて行くことが一番善いことであるといふやうに考へる、恰も消防夫が繩を持つて火事場に赴くやうな勇氣を出すのが日蓮聖人の教であるが如くに思つて居る人もあるやうであります。併しこの尊い命は濫りに捨つべか



らざるもので、さう容易くこの身體を惜氣も無く捧げるといふことは出来ない筈であります、又さう容易い命であるならば何も有難くはない筈であります。吾々の命といふものは、場合に依つては一國とも代へがたい程の尊き命である、その尊き身命を先づ理解しなくてはならないのであります。お互ひに自分の身命は、世界宇宙よりも場合に依つては尙ほ一層尊いといふことを能く理解しなくてはならない、併しその尊い身命すらも場合に依つては捧げることが何でもないといふに至つて、始めて眞の不惜身命の意義が實現されるのであります。さういふ不惜身命があつてこそ世を救ひ人を救ひ、國家社會を救ふことが出来るのであらうと信じます。故に日蓮聖人の教を信ずる吾々は、今日のやうな程度に於て容易に身命を捨てるといふことは出来ない、未だ／＼モット我が國家の爲に社會の爲に人類の爲に、吾々が命を捧げなくてはならないモウ一層切迫したる時機

が到来すべき筈でありますから、その時まで吾々は互ひに修養して、さうしてこの偉大なる貴重なる身命を捧げるといふことに奮闘努力する、そこに日蓮主義の信仰があると信ずるのであります。

今後は前に申したやうに日本の地位といふものは僅かな陸海軍の力に頼ることは出来ないものであります、國民は一人も残らず世界人類に對して何人の前にも屈しない所の勇氣を以て、さうして正義公平を主張して行かなくてはならない状態に達して居る。さういふ正義公平を強く主張して、命懸けに之を唱へて實行することになれば、日本の將來は世界人類を感化し、世界の文明を増進する上に於て、大いに貢献することが出来るのであつて、茲に始めて日本國民の地位が世界の中に重きを爲し、日本國家の前途も始めて太平になるのであらうと私は信じます。その信念を國民一般に普及する上に於て、日蓮聖人の如く熱烈にして、さうして智者に吾が義が破られ

ことである、日蓮聖人は國の爲に柱を立てよと仰せられました、それは總て吾が心に柱を立てよといふこととあります、吾が心に確かりとした柱が立つたならば、日蓮聖人の仰せられた如くに、日蓮は世間には日本第一の貧者である、併し佛法を以つて論ずれば一閻浮提第一の富者であるといふ、この時自慶法悦の情操が出て来る筈であります。我國に於てもこれから貧富の問題、勞働資本の問題が起つて來るであらう、歐洲に於けるが如く貧民階級の者が資本階級を掠奪することが權利であるといふが如き亂暴な考へが一方にあり、他の一方に於てはそれを敵として戦ふといふやうな考へがあつて、貧富が相互ひに戦ふやうな状態を、或は實現せられるやうになるかも知らんので、斯の如き悲惨なる階級戦争を實現せしめずして、あらゆる人間が互ひに信仰的の生活をなして、常寂光の都を此土に實現するやう、今日からお互ひが斯の如き見地に立つて信仰的生

なければ何人にも屈しない、如何なる誘惑にも如何なる脅迫にも怖けない、唯だ正しい道理に依つて、道理に負けたならば何時でも日蓮はその主張を撤廢すると言はれて居るが如くに、我が國民はこの信念に従つて世界人類の前に強き決心を以て道理を主張し正義を主張し、世界の平和、人類の幸福を増進する爲に努めるといふ所に、日蓮聖人の教が一閻浮提に弘まる運命を有つてあらうと思ひます。さういふ風に國民を導いて行くことが出来れば、日蓮聖人の教としての一天四海皆歸妙法が實現せられるのであります。

斯ういふ事を主張しなくてはならないといふに就ても、吾々お互ひが先づ他に對していふよりも自分の心の中に確りした柱を立てなくてはならない、吾が心が世間の名譽であるとか、僅かな世間の富といふやうなものゝ爲に動搖して、心の中がグラ／＼して居つてはさういふ結果は到底實現し得べからざる



活に進んで行くことになれば、その悲惨なる運命を轉じて眞に一般の幸福ある常光の社會を實現することと思ひます。

さういふ風に各々の人間が心懸くる點に於て日蓮聖人が

我れ日本の柱とならん。

と仰せられた言葉が如何にも適切であります。吾日本人は如何なる階級に居る者でも、資本の階級に居る者でも、勞働の階級に居る者でも、互互に「我れ日本の柱とならん」といふ信念を以て生活致しますれば、日本國家の安泰は、自ら實現さるべきである。又一我れ日本の柱とならん」といふ考へを以て生活すれば、男と女の關係に於ても正しき方針が立つ、西洋の如くに男女が全く同じになり、女が男のやうな者になり、男が女のやうな者になつて、男女の區別が無くなり、男にもあらず女にもあらずといふ人間ばかりが出て来るならば、それは人類の

幸福にあらずして人類の破滅であると言はなければならぬ。女は女として日本の柱となるといふことは、何も參政權を得なくてはならぬといふことではない、又女が屋外に活動しなくてはならぬといふことではないのであつて、日蓮聖人も「女人となるは物に従つて物を従へる身なり」と言つて居られるが如くに、世の中には優美なる徳性を備へて居る女性があり、さうして剛健なる徳性を備へて居る男性があつて、剛柔相和して人生が始めて圓滿幸福になるのである。男性女性が互互に敵として闘ふといふが如き状態を來すのは、西洋文明の弊害でありますが、我國にその弊害だけを持ち來すことに努力する人が少なくないのである。これは西洋諸國に於ても已むを得ずしてさうなつて居るのであるから、將來日蓮主義が一躍浮提に弘まるやうになつたならば、さういふ状態を救済することが出来る筈である。併し彼等を救済するに先立つて、我國に於て圓滿な

る社會を實現することが第一の急務であります。我國に於てはその先進國の弊害に省みて、正しき信念に依つて人類の幸福を、彼等の状態よりも尙ほ一層高尚なる程度に進めるやうに、努力しなければならぬのであります。

併し斯ういふ風に申しますと、一方に於ては資本家が跋扈するとか、或は政治上の権力者が跋扈するとか、或は男子が女子に對して跋扈するとかいふことを見通すやうに考へて、又その點に於て解すべからざるものであるといふ事を、熱心に唱へる人もあります、その點は素より尤な事であつて、女が男子と權利を争ふといふ事は善くないと言つても、それが善くないといふだけで放任して置くならば、これが男子の罪惡であり、社會は甚だ不完全な状態に陥ることになるのである。随つて女子のさういふ要求の必要の無い状態に至らしむるが爲には、男子自ら省みて、今日までの男子の女子に對する横暴を自ら

反省し矯正しなければならぬのである。又資本家としての立場から言へば、日本の如きは前に申したやうに、未だ貧弱な國家であつて、資本國ではないのである。随つて日本國民は上下擧つて、一層雄大なる資本國と成し、日本の國富を發達せしめなければならぬのである。併しそれを良い幸ひとして資本家は勞働者或は無資産階級が、どう成つて居つても宜しいといふやうな態度に居りましたならば、これ亦許すべからざる事であるから、正しき日蓮主義に生きたる者は斯の如き資本家を警醒し、政治社會を覺醒せしめて、總ての人類が完全なる生活を遂げ得られるやうに、總ての者が圓滿なる幸福を得るやうに努力奮闘しなければならぬのであります。この意味に於て日蓮主義は、一方に於ては西洋人の今日苦んで居る所の所謂改造の思想、彼等の所謂改革の思想といふものは、一概に排斥は出来ないの、改革すべき原因のある總ての方面に對して改革



を加へるといふ事が、日蓮主義の主張でなくてはならない筈である。唯だ單に西洋の改革といふ事を蛇蝎視して、さういふ事は罪惡であると言つて之を排斥するといふことは出来ない筈である。随つて吾々是一方に於ては現在の狀態に満足することが出来ないであつて、あらゆる方面に於て改革を叫ばなくてはならない。併しその改革は自己の勝手な慾心から出たものでなくして、眞に我をも人をも佛にするといふ意味からの改革でなくてはならないのである。斯の如き見地より改革を叫ぶといふことであるならば、百の改革は皆歓迎すべきことであつて、斯の如き改革に依つて始めて人類の幸福は増進が出来るのである。日蓮聖人の教は既に改革改善といふことを叫んで居る教である、唯だ温厚に育つて居るといふ教ではないのであつて、吾々人間が佛に成るまで改善改革を叫んで止まないのが日蓮聖人の主張であります。随つてお互ひに菩薩道を行じて、自分を向上

せしむると共に、又他を向上せしむるといふ意味に於て、各々の人間が互ひに提携し、心を一にして各々が「我れ日本の柱とならん」といふことにさへ覺悟を極めて行きますれば、お互ひの幸福は勿論、我が國家の幸福安寧も期して待つべきことだと思ひます。又斯くあつてこそ始めて日本國の將來は世界に一段の輝いたる國と成り、今日は五大國の一でありませうけれども、總ては日本が世界の最も偉大なる地位を占むる理想的の國家と成ることも到來すべきことであらうと信ずるのであります。それを來すか來さないかといふとは、今日現在活きて居る吾々お互ひの責任であります、之を過去の人間に望むとも出来なければ、後の子孫に望むことも出来ないものであつて、今日のお互ひが唯今即刻からその心になりさへすれば、段々とさういふ方向に進んで行くのであります。私はこの意味に於て此の御寶前に於きまして、諸君と共に斯の如き信念の下に今後世の爲め國の爲め世界の爲に、互に相提携して努力して行く事を誓ひたいのであります。之を以て此の講演を終ります。



教 義

日蓮聖人教義綱要 (第四十八回)

井 村 日 威

第十一章 本門の戒壇

第七節 因壇と果壇

古來我宗の教學上に於て、三大秘法を本因、本果、本國土の三妙に配して左の如く當欲て居る。

本門の本尊……………本果 妙

本門の題目……………本因 妙

本門の戒壇……………本國土 妙

本門の本尊は本佛果上の淨用より、我等衆生を救濟

すべく垂れられたる慈悲の結晶であることであれば、此を本果妙と稱したのである、本門の題目とは我等か佛の救濟の手に總りて、向上發展の途に上りつつある場合を云ひしものなれば、此を本因妙と稱したのである、本門の戒壇は此本果妙の本尊と本因妙の吾人の信仰とが結付いて終始相離れざるの狀態に置いたものであるが故に、其最終に於て、始本不二の佛果を成就したる曉に於て、本國土の當相を示現したる場合に於ては此を本國土妙と稱し得



る譯合であるが、現在世に於て我等の信仰の當處に於て戒壇を論ずる場合に此を直に本國土妙として見ることは適當と考へられない、そこでこれを適當に考へるには、戒壇に因壇果壇の別あることを知らねばならぬ、本章第一節に於て述べた戒壇の三要義を因果の二壇に分別すると。

能所一俱、教行一致は因中の戒壇……………因壇  
始本不二は果上の戒壇……………果壇

と云ふ事に相成る譯である、これは從來斯く區別せられた事は無い様であるが、當然斯く因中果上に區別せられねば、今身より佛身に至るまで持續して行く戒法とは云ふ事は出来無い事と思ふのである、前節に於て述べた事壇理壇の如きは共に因中の戒壇である、我等の信仰の當處即是道場なりと觀じ、是處直に諸佛成道の處轉法輪の處涅槃の處なりと説くも

ぜよ、法界寂光土にして瑠璃を以て地とし、金の繩を以て入の道をさかひ、天より四種の花ふり、虚空に音樂聞ふ、諸佛菩薩は皆常樂我淨の風にそよめ給へば、我等必ず其數に列らん。(編道一六)

と、我等が信仰成就の曉の状態を説かれたのであ、此即ち果壇である、斯く戒壇を因果の二壇に區別して考へる事に於て我等の信仰は適當に信解せられる。因果を混亂するの結果は即身成佛を骨張して修顯得體を否定するか如き謬想に陥るものもある有様であるが、大に戒慎せねばならぬ事柄である。

### 第八節 三秘の要領

以上三大秘法に就ては大要を申述べた次第であります、要するに日蓮主義の信仰は本佛釋尊の大慈

要するに因中に果を説くに過ぎないのである、又事の戒壇道場建立せられたりとするも、是又凡夫界中の事相の道場に過ぎないのであるから、矢張因中の戒壇に過ぎないのである、我等が信仰成就して、始本不二の覺體を體得し、本國土常住實在の當相を示現するのが、眞實の果上の戒壇である、經に

我此土は安穩にして天人常に充滿せり、園林諸の堂閣種々の寶を以て莊嚴し、寶樹には華果多くして衆生の遊樂する處、諸天天の鼓を撃て常に諸の伎樂を作し、曼陀羅華を雨して佛及び大衆に散ず。(編法三四〇)

と説くは、本國土妙果壇の姿である、日蓮聖人の曰く、

日夜朝夕南無妙法蓮華經と唱へ候て、最後臨終の時を見させ給へ、妙覺の山に去り登り四方を御覽

悲に其根源を發し、其大慈悲に乘托するのが我等の信仰に外ならぬのであります、本佛釋尊の大慈悲は我等衆生の虛妄に横計して我他彼此の差別の不善心を起し、諸の惡業を造り六趣に輪廻するの状態を知し召して、此を憐愍し救濟せんとして發し給ふ處の大慈悲である、佛の慈悲は我等の虛妄のを見を捨て、諸法の眞實相即ち一相一味の平等海に歸入せしめんとせられたのである、眞實の幸福、眞の平和は平等海中に於て生ずるものである、差別見は苦惱を生ずる根元であると説いたものが佛法である、佛陀の無上覺とは即ち平等覺である、徹底せる平等觀を證たものが佛陀の證悟である、此證悟を以て一切衆生に與へて凡て同一の證悟を與へ人とするのが佛陀の誓願である。

我本誓願を立て、一切の衆生をして我が如く等く



して異なること無からしめんと。(前法九二)

此は釋尊の本願である、又諸佛の本願を擧げて。

諸佛の本誓願は我が所行の佛道を普く衆生をして

亦同じく此道を得せしめんと欲す。(同九七)

と、佛陀の教は但一切衆生皆佛性ありと教へ、理論的に佛性ありと説くのみでなく、此を實現するの方法を教へたのが佛法である、但佛性ありと丈説いたものであつて實現の方法を説いて居らぬならば佛法の價値は無い、佛教は理論よりも實行に重きを置いて居るものである、平等の理想を實現する事に努力するのが佛法である、其實現の方法とは何ぞやと云ふと、凡夫が虚妄の見を捨てることである、差別の謬見を打捨てることである、凡夫は差別見の爲に我身を愛し我が爲に欲望を起す、夫が即ち迷と稱せらるゝものである、其迷見を根底より撤廢せねば眞實

の理想に生さることは出来ぬ、現今社會主義と稱し過激思想と稱するものも理想目的を平等主義に置くことは佛法とは違はぬが、其實現の方法を過つて居る、彼等は各自の思想を根底より改むること無くして、平等の社會を實現せんと計るのであるが、此は到底實現の仕様が無い、各自自我の強い連中計が寄つて集つて平等の社會を造らうと仕たつて出来る筈のものではない、眞實の平等平和の社會を造ることは、各自が自我を没却して平等の思想を徹底的に懐く様に爲らねば實現出来るものではない、平等の思想を徹底的に實現したものが佛陀の證悟である、そこまで行かねば眞實の幸福眞の平和は無いのである、現在の世界、人間の仲間では到底平等の理想を實現するの機會は當分來さうにも思へない、そうすると我等は出来る丈其理想實現に向つて努力するの外は

無い、我々の自我は何時でも我を愛せよと言ひ出すが、此を抑制し矯正して、我を捨てよ他を愛せよと考へる様に改造して行かねばならぬ、此改造を實行して行くのが佛法の修行である、佛陀の教法の規矩準繩に則りて各自の精神を陶冶改造する此が第一肝要の事柄である、各自の精神を改造せずして、平等の理想のみを憧憬して居つても遂に其理想を實現することは出来ない、斯る事柄は理論として論ずることは容易い事であり當然の事と思惟せられて居る事であるが、而も實際に爲ると中々實行せられて居ない、夫れ程實際的には困難の伴ふものである、此困難に打勝つて不屈不撓の精神に住するもの此即ち信仰と稱すべきものである、日蓮主義の三大秘法は要するに以上の事柄に過ぎない、本門の本尊は我等が理想の境界と實行上の標準とを教示したるもの、

本門の題目は其標準に一致したる實際上の行動を定めたるもの、本門の戒壇は實行上の誓約で、中途挫折を豫防したるもの、夫程實行困難の事柄であると云ふ事を思はねばならぬ、佛法信仰には此根本思想を忘れてはならぬ、現今の佛教信者日蓮主義者の中には、自己の欲望も満足せしめんが爲め、自我の小利を貪らんが爲めに信仰するものもある様であるが此等は佛陀の根本精神に背反して居るものであつて眞實の救済を受くるには大分距離のあることを思はねばならぬ、現今日蓮主義物與の機運に際し多數の日蓮主義者の中には聖人の教義を理解せざる未得己得のもの有りて聖人の教義を案さんとせり、聖人の教義研鑽の士は慎重の態度を取りて能く其眞髓を體得せられんことを希ふ次第であります。





思想問題

# 遠慮なき皇道大本教の批判

記者

(三)皇道大本教は我國に於ける夫婦間の根本思想たる夫唱婦隨の觀念を破壊せんとするのみならず、風俗を壊亂するの毒素を有す

大本教の宣傳書(皇道學講話第四章八八頁)に左の言あるは注意すべき事である。

諸君は恐らくは今迄先入觀念として把持して居た所の岐美二神の性的區別に關する觀念に、矛盾を感ぜらるゝてあらうと思ふ。それは古事記には「伊邪那岐命が成成不成合處一處」を持たれたる男

解るのである。

伊邪那岐命は(變性男子)即ち男性靈魂を備ふる女體であり、伊邪那美命は(變性女子)即ち女性靈魂を備ふる男體であるのである。

然るに古事記には、於是問某妹伊邪那美の命曰汝身者如何成、答曰吾身者、成成不成合處一處任爾伊邪那岐命詔、我身者成成而成餘處一處在云云

とあるので全然右引用の文句とは反對である、これは著者の讀み誤りと見る方がよろしからんも、前にも記せる如く所謂御筆先には日の神伊邪那岐命を女體なりと明言するのみならず、古事記には岐美の二神は肉體の男女性を無視して、其の靈魂の陰陽を記せるものなるものなりと斷言するに至りては、これを誤讀なりとなすべし理由を發見し得るのである。何となれば古事記には岐尊を男體に記し、美神を女體に記しありて決して岐尊を女體となせるが如き事

神であるやうに記述されて居るのに、御筆先には日の大神が「我身は女體の事なり且又斯んな業の深い見苦しき姿でありますから」と大變に謙つて居られる事である、そうして其の續きの御筆先には「日の大神伊邪那岐命」と書かれてゐるから、日の大神は伊邪那岐命であるに相違ない、そこでこの二つの觀念に矛盾を來たさない爲には、伊邪那岐命は男神であつてしかも女體であるといふ事になるのである、——古事記に記載されたる岐美二神は肉體の男女性を無視して、其の靈性の陰陽を象徴的に書かれて居るに過ぎないと云ふことが

がないからである、これも或は出口直子は女體にて男靈なりとの主張を傍證せんとするの小細工にあらざやと思はるゝふしもないではない、女體男靈の岐尊先づ唱へ男體女靈の美尊これに隨ふを人倫の道として立つるにあらざれば、大本の信條に大なる動搖を來すの恐がある、而も肉體を以て謂へば婦唱夫隨は道に協ふを教へんが爲には、如此なざざれば能はざるは理の當然である「肉體的婦唱夫隨は靈的に夫唱婦隨の正道に合するが故に、夫婦の道はこれを以て正當とす」の觀念は此の處より生ずるのである。

原來古事記中國民道德と大關係あるは、二神の美斗能麻呂波此に當り、夫唱婦隨の實を示されたる事である、即ち男神岐尊(肉體的)先づ唱へ女神美尊これに隨ひ、こゝに始めて夫婦の道を全ふすべきを教へられたのである。それと同時に婦唱夫隨の結果、姪子以下の不完全にして(葦船に入れて流した)御子の中には入るゝ能はざる程の御子を得られたる



を明かにし、其後天の神に伺ひ夫婦隨の天則に従ひ天照皇太神以下の三貴子を生み給ひし事實を掲げられたるは、我日本民族の道德觀念の基礎として大切の事である。然るに伊邪那美命は女魂男性の良人なり、伊邪那岐命は男魂を備ふる女性の妻なりとして、婦唱夫隨の道を唱へ「家庭に於ては妻先づ良人に先じて始めて家内の圓滿が保持されるのか惟神の原則である」(講話九〇)と放言するに至つては許し難き事である、而かも靈主體從の大本教原則に鑑み、岐尊は妻にして、美尊は夫なりとするも、其の實岐尊は男魂女體なるが故に、夫唱婦隨の原則に悖反する事なきが如くにも考へらるゝが如きは、果して如何なる結果を生ずべきか、大本二世の純子は變性女子にして男魂なり、王仁三郎は變性男子にして女魂なり、故に大本教の原則として純子は内に宜しく、王仁三郎は外に宜しく、純子内を守り、王仁三郎外に活動するならんも、家庭内に婦唱夫隨を實踐する

とせば、是れ果して正道としてこれに従ふを得べきか、若し彼等の關係を日本國中に廣めなば、日本國の道德は根本的に破壊せらるゝに至らん、況んや大本の原則としては女體には男魂を宿し、男體には女魂を宿す(講話九六)と明言するに於てをや。又同講話同章第十一(九六)に左の言あるは更に注意すべき價値ありと信す。

然しながら斯くの如き男女の社會連帶が完全に天則に當嵌まるのは、肉體の男性が必ず女性靈魂を宿して居り、肉體の女性が必ず男性靈魂を宿して居ると云ふ原則に協ふ場合だけである、然して何人も亦男であるものは女性靈魂を宿して居り、女であるものは男性靈魂を宿して居るか云ふ事は、靈統の混亂した現代に於ては、確實に斷言する事は出来ぬのである。

の靈魂には、此の靈魂を授ける、此の靈魂の宿りて居る肉體には此の靈魂の世話をさすと云ふ事は、世を持ちて居る世を構ふ神の指圖で、靈魂を自由に致すのが此の世を守護致すのであるぞよ」とある通り夫婦の問題にも、靈魂授與の問題にも、正神界の中堅は隱退してこれに拘らず、在來世を持ち來つたへツボコ神々の指圖であつたらしいのである。

それ故姦通しても子供が出来る、従つてこれまでは靈魂の授與も精靈の受胎もある程度まで正規的でないらしいのである云々(講話九六)

人生の最大問題たる夫婦成立の問題を、ヘツボコ神の自由に委する眞の神は果してあるべき筈であらうか、夫婦の成立は靈と靈とによる故に、靈と靈とにして相結合せば、神はこれに受胎の精靈を與へるので、従つて姦通の間にも子供が生れるとの觀念は、更に一轉して靈主體從の大本原則に照してこれを見れば、誠に忌はしき觀念を生ずるにあらざるか、大

本教の唱ふる如く夫婦の成立に關しては、眞の神これに關せず所謂「ヘツボコ」神の管掌裡にありとすれば、眞の神は夫婦關係を重視せざるべしとなり(寧ろこれを冷眼視することとなり)若し然らずして其の眞實の神は、夫婦成立の關係を重大視し、決してこれを邪神に委せずとせば、靈主體從の關係上姦通もなほこれを恕して子孫を與ふる事となるべく、いづれより觀察するも大本教の立てる見地は風俗を壞亂すべき惡思想を醸成するものと斷言せぬを得ぬのである。更に最後に一言せんに、大本教の主張にして可なりとせば

一、女(肉體)の家長たる家庭は眞の家庭なり、假令家長たらざるも、婦唱夫隨の家庭は正しき家庭なり、惟神の道に合する家庭なり。

二、靈主體從は理想的境界として大本教の主張するところなり、故に靈的結合は體的結合より正しく、且合理的なり、夫婦の間に靈的結合なき



場合靈的結合の堅き男女間の肉交は道に背かざるものなり

との觀念を涌起する事なきか、右の第二項の如きは誠に極端なりとするも、相愛せざる若くは愛の去りたる夫婦の結合は偽善なり虚偽なり、真に相愛する場合に於て此の偽善を打破し、新しき正道に入りて相愛する新境遇を造るは、何等の差支なしと放言するものすら輩出する現在の有様に於て、第二項の觀念を鼓吹するは、國民道德の維持上一日も恕し難き處なるべしと思ふが、吾輩は此の一事を以ても大本教は風俗を壊敗するものとして、これが撲滅を圖らざるべからずと信ずるものである。

(四)大本教は科學を無視し、國民をして荒唐無稽なる信仰に入らしめんとするものにして、國家の進運を阻礙するものなり

對象としてのみ顯はるゝものである。然るに大本教は科學を否認するの態度を示すので、思慮の未だ定らざる青年にして同教を信ずるものは、動もすれば學業を無意義なりとし、斷然修學を捨てて退校するものすらあると云ふ事である、此事實は大本の宣傳書の自ら吹聴する處であるので決して誤聞ではあるまい、大本教は果して學業を捨てて大本に走るを獎勵するであらうか、教祖直子の筆先は明らかに之を證するも、此筆先なるものは果して迂散臭きものではないであらうか、若し大本教に入るもの多くは學業を捨て、大本教もまた之を獎勵するならば、皇道大本教は確に亡國の邪教である、少くとも現代に害毒を流すものである。

何には兎もあれ大本教宣傳書の説く所は科學を否定するものである、巧にまた結論に達せざる最近科學の示す所を引用して、自己の所説を證するは一見科學を重視するに似たるも、唯單に之を引用するの

大本の神論に

神と學との力競べを致すぞよ學の世はもう濟みたとあり、これ啖かに神力と學力との競争を説くと同時に、科學を賤しとするの意向を示すものなり。眞

ぞよ神には勝てんぞよ(明治廿五年舊正月の御筆先と傳ふるもの)

の神は果して如此ものか、若しそれを愚にして己を信ぜしめんとするが如きは、決して正しき神ではあるまい、神は二千年以前に於て、猶太の大工の子「イエス」をして、天國來を叫ばしめたるも今は果して如何であるか、天國は未だ來たらんではないか、吾輩は神を利用して己れの地步を作らんとするもの多きを悲しむと共に、世の所謂不可思議底の事實を擧げて神力なりと信じ、之に憧憬して常識を失するの人多きを嘆ずると同時に、以上の謬見を鼓吹して其の位地を保維するを惡む事蛇蝎も雷ならざるものである。人力を盡して後其及ばざる處に於て神力を念ずるは正しき人にして、神は此正しき人の念ずる

みにして、決して之を敬信するにあらず、反て學説の信ずるに足らざるを思はしめんとするの手段である、天動説を唱へて地動説を否定せんとするが如きは、科學を無視するの甚しき者で、電子及イオンの性能を識しやかに説明し、靈と體との交錯したる關係を證せんとするが如きは、單に之を利用し終に之を捨つるものである、若し大本教をして唯單に舊學を否定して、自己の新學を起さんとするに止まらしめば、或は恕して之を看過するもよからう、然れども之を結ぶに神啓を以てし、信仰の心を以て學問を否定せしめんとするが如きは、決して輕々に附すべき事ではないのである、而かも之は事實である、吾輩は一日も如此邪教の存在を許さざるべく當局者の努力を望むものである。

大本教が世界の絶對無比の第一眞神として天の御中主神を齋き奉るは、蓋し何人も異論のなき處であらう、少くとも此種思想を有する人の公論として、



これを認めて差支ないのであらう、又此大神は本有の神にして、森羅萬象悉く此大神の分身なりとの思想も強ち咎むるにも足らず、併し此大神は靈と體と力との三元より成り、靈は左、體は右にして是れに力を加ふる時は、本來の靈體は左進（靈）右退（體）の結果となり、森羅萬象悉く皆同様の運動をとるのであると斷言するに至つては少しく考慮を要するのである。少くとも餘りに機械的で而も獨斷的である、假りに大神の神勅として之を許すとすると、其の説明の杜撰なる殆んど抱腹の至りである。通例の場合に於て左進右退とすれば、時計の針と同様で右旋りである、手拍子をとるも味噌を摺るも、其他あらゆる運動は大抵右旋りである、朝顔の蔓も同様である、然るに大本の講演者はこれを例とし、之を稱し左旋りと云ふのである、多分裏の方から見たのであらう、これは如何假定にするも敢て咎むべきにあらざるも、味噌を摺るとか手拍子をとるなどは、

自ら右手の運動を主とするの結果で、颱風の旋回の如きは地球の運行の結果、南北半球は正に反對である、貝の旋回は悉く右旋にして、たゞ一種「リッツアーシユエル」と稱する左旋りの貝を見るのみであるが是等は別に論ずるに及ばぬ事である、此理を以て地動説を天動説に變じやうとするなどは沙汰の限りである、況してや假りに天動説を可とするも、南半球より見れば正に反對に見ゆるのである、何に致せば大本の唱ふる處に依れば、天動説は皇道天文学の示す處にして、同天文学は神啓にして凡俗の嘴を容るべき處でないといふ事であるが、猥りに神啓を振り廻して人口を閉さんとするが如きは不都合である、元來神啓は讀んで字の如く人をして悟らしむべきもので、強制的に之を信ぜしむべき性質のものではない、さりながら若しも大本天文学が正當で天動説を可なりとせば、今日の航海學は成立せぬ、從て海上交通が出来なくなり、物理學は根柢より壞れ今日の科學

は全然價值なきものとなるのである、唯單に天啓の劍を振り振り、獨斷的に天動説を唱ふるが如きは愚の骨頂である、然も其理由とする處は、地動説は左旋りの天則に合せぬと云ふのである、若し天動説に對し大本の説く處にして果して右の如き愚説に止まるものとせば、これを一笑に附し去るも害なき一小事であるが、種々の問題に對して此説を利用するが如きは恕し難いのである。

天動説の他の論據としては光の速度である、さりながら光の速度の如きは決して實際問題にはならぬ地球の自轉の速力と光線の速力の比などは實際問題にはならぬ、僅か二萬一千六百哩を一晝夜に動く虫の這ふ様な速力と、九千何萬里と云ふ大距離を僅八分程で走る光線とを比べて見ると、殆んど七十萬分の一位である、如此問題を以て天動説を説くが如きは大なる滑稽である、何に致せば「ニュートン」の原則が破れ、太陽の質量及大きさが地球よりも小なり

との證據を挙げなければ、天動説などの成立すべき理由はない。

大本に自家撞着の多きは今更論ずる迄の事でもないが、其の所論上自家の天動説を否認するが如き論説あるは、興味ある事實である、大本教の説く所に據れば、

物質分子に於ける普遍的原則は、宇宙の根元實體に於て見本的に眞理である處のもの、の再現である物質分子及原子を検する三個の陽電體を中心にして、その反對性の數個の電子が其の周圍を廻轉しつゝある事を知らば、大宇宙に於ても一個の中心天體を中樞として、幾多の遊星其の他が其の周圍に廻轉しつゝあるを知るべし（講話三七）

右の叙述は疑もなく地動説で、前の文の天動説に對し甚しき自家撞着の如くに見ゆるのであるが、其の實決して自家撞着にあらずして、其の中心天體とは此の地球の事なりと云ふに至ては驚かざるを得ぬの



である、(後章宇宙創造説参照)如此迂説を堂々と論じて毫も愧色なき大本宣傳者は、更に論據を進め大要左の如く云ふて居るのは一興である、

言靈元子(聲の子)にも陰陽あり、それより生成化育し來れる森羅萬象にも陰陽の別ありて生じ、(大本では宇宙の萬物は神聲より生ずると信ずるのである、しかも其根據は耶蘇教の聖書「ヨハネ」傳に大初にことばあり、ことば(道)は神と偕にあり、道は即ち神なりとあるにてこれを證せんとするのである (講話三〇)陰陽は大初より備つて居るが未だ割れざる状態の言靈元子の活機隨々乎たる振動による聲音が太初の聲音で①(す)の聲である (講話三八) 尙ほ言靈に關する次章を見よ。

など、途方もない事を論じて居るのである、併し若し大本の天啓天文学は實際神の聲であるならばまだしも凡人しかも學問を否認する低級の凡夫愚婦が獨斷的に神の言なるが故に信ぜやと云ふが如きは借越

である、而して又陰陽未割の言靈元子はそれく陰陽未割の言靈元子を中心として、旋回しつゝ宇宙の中心に向つて左旋し、又大宇宙の中心より右旋しつゝ相振動し「す」の言靈を生成するなどは(講話三八)何と云ふ噓言であるか、右と云ひ左と云ふも、

或は中心に向ひて左右を區別し、或は中心より見て其の左右を定めつゝ自由に其の稱呼を變じつゝ尙左進右退を左旋とするが如き曖昧なる説明は、大本の常用手段と見えるのであるが、兎にも角にも中心を樞軸として、宇宙の萬有が旋回しつゝありとの理論を主張するので、この一點から見れば如何にも地動説の如くにも見えるが、其の實地球が地心なりとの謬見に立ちて居るのは驚くべき事である、其の證據としては所謂御筆先の一節にかう云ふ意味の事がある。

それから又天の固まつたのは六六六様と五六七様とが天に上りて、各自水火を合してキリ／＼と左

右に二三遍舞なされて、伊吹の狹霧といふをなされた時に天が完全に出來た、そうして吹出した伊吹の狹霧によつて天に幾億萬の星が出現した、

それから其の星の數丈け地の世界に生物が育ちたら夫れて一旦世の洗ひ替に成るのであるぞよ(講話七一)  
大正八年舊正月十八日の神諭と稱するもの  
直子の授後の神諭なるも其の神諭にあらず

と云ふのでも分る、殊に此場合に注意すべきは是等の神業は龍宮館に於て成されたので、其の龍宮館は即ち綾部の本宮であると云ふのだ (大正八年舊正月十八日の神諭) 即ち天體の成立以前兩柱の「ミロク」の神様が第一にてこの世界を造り堅め、然る後他の天體に及んだと云ふのである、しかのみならず大本の説く處に依れば、天の常立尊を或る人は天體育成を掌らるゝ火水だと云ひ、或る人は天體運行を掌られる神だといふ、共に所以ありだが、まだ此の時には天體は生成されて居ないので、天體的創造は伊邪那岐伊邪那美二神を以て創まるのである(講話一二〇)とある

ので尙更大本の思想は地先天後の論で、天動説であると云ふ事が明瞭に分るのである、何と云ふ妄談であらうか。

それから大本では今日の凡ての學問を否定する一節として、今日の學問では如何にするも、人間や動物を解剖する譯には行かぬと主張しつゝ、

人間の死體を分析すると、炭、酸、窒、磷、鐵、硫黄、ナトリウム、カリウム、カルシウム、マグネシウム、鹽、沃度等の諸元素から成ると云ふが、無機物と有機物との關係はたゞ化合の様式のみであるかと科學者は云ふが、決してそんなものではない、有機物は生體のまゝ分析が出来ぬ、從て死體を分析して生體の成分を知るは不可能なり (講話第十一章ノ一)

と論じて居るのであるが、此の立論は大本としては確かに大出來だ、蓋し大本歴史の大作だ併しこれによりても今日の科學を如何に否定するやの想像が出



來るのである。

吾輩は今日の科學の正否果して如何を知るの明なきも、科學上より判斷したる凡ての學問は、是れを信ずるのである。假令絶對にこれを信ぜざる迄も、今日の科學の全體を否定するが如きは、確かに我學界の賊であると同時に、世の進運を妨害するものと斷言するのである。天下の愚夫愚婦、若くは老齡にして事を省せざる隱居の身に對して、此の意見を鼓吹するは暫く恕するも、後來大に活動すべき幾多有爲の青年に、此の思想を鼓吹する大本は、決して許すべからざるものと信ずるのである。況してや其の荒唐無稽なる事多言を待たずして明なるをや、予は一日も如此邪教の存在を許さざる方針をとらん事を、世の先覺者に勸告せんと欲するものである。

### (五)大本の言靈學は餘りに牽強附會にして滑稽の限りなるも、信仰と相伴

とは、大本者流の廣言する處である(裁判一三四)

以上言靈學研究の至難なるを説く處如何にも尤である、由來所謂言靈學なるものは、極めて學び難き一種の超越的學問である。如何となれば其の解釋の法式が一定せぬからである、學者の機智を以て隨時好都合に自由なる解釋を下し得べき範圍の廣大なるが爲である。場合により變化し、且つ之を構成する事自在なるを以てある、而して大本言靈學は實に其の最なるものである、火を「か」水を「み」と讀み火水を神と讀むに對し、他の一方にては水火を「いさ」と讀み、靈を「ヒ」と讀み「ミ」と讀み、從て「ヒノモト」を靈主體從と訓するが如き、君をキミと訓するは、伊邪那伎伊邪那美二神の、末字の伎と美より出ると釋くが如き、猶太人「ヨハネ」を邦語に翻譯して、世間根「ヨハネ」即ち世の初と訓するが如きは、殆んど滑稽である。花川戸の助六を「スケツククス」即ち「シシリー」人と譯するのと、大差なき

ふが改に世人を蠱惑する力大なり、故に人をして其の妄を悟らしめざれば、一種の深刻なる觀念を與へ、思想を惡化せしむるの害甚だ大なるべし、之が宣傳に嚴重なる取締を設くるのみならず、斷然之を禁止するの要ありと信ず。

皇道大本教の三大教則は大本神諭と言靈學と鎮魂歸神法の三者にして、其の核心は是等の教則を打て一丸となしたる中心點にあるも、入信の目標としては其の何れを選ぶも妨げなし、併し世の中に於て最大難關を有する教理は言靈學である、如何なる非凡博識の人と雖も、此の學ばかりは三年四年の短日月を以ては、到底其の蘊奥に達する事が出来ない、幽玄の法微妙の理、半解未知て之を闡明する事能はず

状態である。大本言靈學によれば、高天原(たかあまはら)の「た」田は對照の義「か」は掛貫力「あ」は至大照々、「ら」は循環運行の義であると云ふ事である。(講話五二)

更に所謂神慮なるものを付度し、吾輩の言靈學を以て解釋を下せば、「た」は「たくらぶる」の「た」、「か」は「かく事」の「か」、「あ」は「あらはれ」の「あ」、「ま」は「まつたし」の「ま」、「は」は「はるか」の「は」、「ら」は古來「る」に通ずるが故に、循環運行等自個の動作の意味の動詞の結尾に用ゆる語として、是れを解釋し得べしとせば、必ずや大本の先生達の御意に協ふであらうと思はれるのである、如此言靈學はこれを滑稽と云はうか、これを痴呆といはうか、殆んど評するの言葉もなき位である、大本の人は世界の建直を行ふが故に直子じや。純子の「す」は大本言靈の最も崇むる、即ち皇の「す」、みは即ち身である、即ち皇身であるとも云ひ兼ねないであらう、



大本宣傳者の主張する所によれば、

元來言靈學は靈魂の種類性質を、聲音から推究する學であつて、往昔は神聖無比の天皇學であつたが、長年月の間に其の存在すらも忘れられて居た、然るに今や神啓により大本教主の手に依て、漸次復活大成の緒に就きつゝあるのである（批判二八）

是は果して看過すべき言説であらうか、神聖無比の天皇學が御皇統に傳らずして中絶し、草莽の賤民たる王仁三郎に依つて復活すると主張するのは、抑も何事であるか、天皇學の本系を王仁氏に依つて復活すると稱するが如きは僭越である。

元來言靈學と云ふは、大本の所説の如きものであらうか、大本の言靈學は一派の捉はれたる國學者流の唱ふる故事附け學問である、我日本國が「言靈の幸ハウ國」と稱するは、正しく貴き詞藻に富める國にして、一言にして神をも泣かしむべき靈力を有する言語の國にして、詞藻の活動の偉大なる國と云ふ

意味である。一言一義を原則となし「ア」と「ウン」の二音に萬有を宿すといふが如き、妙怪なる説を流布せる眞言法師の亞流に過ぎざる如き大本の言靈に、何等の權威を有するものぞ、左は火足にして火の系統に屬し、右は水極にして水の系統に屬するなどは、随分の故事つけてある、やがて火なるが故に陽に、水なるが故に陰に、水なるが故に物質に屬して體を顯はし、火なるが故に靈を顯すといふに至つては評するだにも耻入る次第である。果して大本の説の如く然らば、上は風身に君は木身に、下は霜に通じ（地に置くが故に）て土身となるであらう、今の世に何人が如此拙劣なる謠言に魅せらるゝものがあるらうか、其の會々神啓としてこれを信するものあらば、痴にあらずんば即ち狂なりと謂はざるを得ぬ。智識階級にしてこれを信するが如きは、自ら無智識階級たることを表するものである、第一如此妖言を放て人を惑はすは無慈悲の至りである、確かに人道の

賊である、少しく氣の毒には感ずるが大本の言靈に觸れて見るならば、大本は大に戻るともなるであらう、何となれば大本では「スベルヒト」を「スト」と譯し「スヤ／＼」と眠る事を「ス」と譯するが故に、是の位の事は當り前である、然らざれば「オホ」を笑ふ聲に譯して輕蔑の意味にも見ようか、それとも大本では大は大なり、本は本義の意なり即ち「モットー」なりとも「キリスト」流に譯するだらうか、「キリスト」は霧の主人で即ち豊雲野（野は主）の神であるとの例にならばこれも通用すべき價値を有するであらう、要するに善くも悪くも勝手になるのだ、大に逆るとせば大逆の意味ともならうてはな

いか、大阪を大道、京都を「ケウト」（倦み疾れた意味）名古屋を勿來也、江戸を穢土とも惠土とも譯し得るではないか、王仁三郎の上半を鰐とか鬼とかに見立て、下半を夷三郎に見立て、鬼の如き漁夫とは如何のものであらうか、本當の言靈學は決して如此も

のではあるまい、其の言葉に活靈あり偉大なる力を有するを教ふるものにて、乍恐教育に關する御勅語の如きは言靈の最第一の現はれてある、忠の一字を感得すれば忠を體とする活靈雲の如く心中に湧き、大なる働きをなす處に言靈なるものありて存するのである、少くとも吾輩の信する言靈は如此ものである。

大本の言靈學は要するに不得要領の學問である、これでは四五年位で分らう筈がない、其の代り大本の爲にせよとすれば、一時間でも極意に達し得べき學問である、併し如此活殺自在にして日本語と外國語を混淆し、音と調とを同視し其の處に一の不可思議なる、而かも不眞率不謹慎不詮索なる連絡をつけ、當面の目的に適應する如く鹽梅するを極意とせば、其の研究は百年河清を待つゝの困難を認むると同時に、一日の研究をも要せずして其の活力を發揮する事が出来るのである、六、六、六の三字を「みる



く」などは噴飯の至りではないか、今試に更に大本言靈の自由自在なる状態を観察すれば、大本言靈學は言靈の絶對一元として、伊邪那岐の命の御聲は鳴り鳴りて、鳴り合せる聲で（成り成りて成り合はせる聲）即ち「ア」である、「ア」の聲は口を開かずして出し得ざる聲である）伊邪那美の命の御聲は鳴り鳴りて、鳴り餘れる聲即ち「ウ」である、「ウ」の聲は口を狭く締め口唇を突出せしめし出す聲」と明言するが、古事記の傳ふる處によりこれを大本流に「成りを」鳴りに變化すれば、岐神は鳴り鳴りて、鳴り餘れる聲で、鳴り合せる聲ではなく正に大本の云ふ處と反對である（參照）。如此ことまでも活殺自在にするが如きは、既に言靈の權威を失ふのである、しかも此の二聲か一切の聲を産み出すべき母聲となり、之を還元すれば「ス」の一音に歸すると云ふ事である。是れも神啓との御託宜ならば、引きさがる外致し方ないので、たゞ單に御都合の宜しき事であると申上

る外はない、所謂故事つけの方法をとれば、○の形に統一する事至難ならざるも、流石の大本もこれを「ス」と發音するに至ては更に他の故事つけに依らなければならぬと見える。  
大本の説によれば「ア」と「ウ」の聲は即ち△と∨の聲で、この二聲は○より來ると云ふ事である、（講話六九）果して然らば△と∨を合すれば如何にも其の通りになるらしいのであるが（講話七七）これを「ス」と發音するのは左の如き立派な理由あつて存すると云ふ事である。

吾人の覺醒中は完全に七十五聲を發し、眠れば一音に統合して「スースー」と眠るのである（講話七七）而して又人類の死する時は、其の誕生の時に「ウーアー」と泣くと反對に、「アー」と長く引き「ウ」と力なく韻きて「ス」（○）に歸するのである（講話七八）此の卓説の如きは誠に抱腹的讚歎に値すると謂はざるを得ぬではないか、加之前にも云ふた如く「ウ」

の言靈の代表が陽系の高皇產靈神（岐美二神を混じり同一に取扱ふ事多し）で、「ア」の言靈を代表して、

は如何にも苦しい申し譯けてあると同時に言靈學の權威も疑はるゝのである。

陰系の構成を分擔せらるゝのか神皇產靈神であるから、此の意義を明白ならしめんが爲には、言靈の解釋を要する次第であると云ふ事である、乃ち其の説によれば高皇產靈神は父系釀成產神で、神皇產靈神は母系釀成產靈であるが、「カ」の二音重複する故にこれを約して一言となしたに過ぎぬと云ふ事である。「カカミムスビ」が何時とはなしに一字省略せられて「カミムスビ」となつて居るのである、（「カミムスビ」は誤りにあらざるも、暫く講話七九に據る）一字の誤讀の爲め「金杓子屋」か「悲しやくやしゃ」と讀まれた笑話さへ傳えられて居るのに、自分の勝手手がいと申して、猥りに略するなどは恕すべき事ではない、但し大本自身も聊か不安心と見へ、神皇產靈を釀成水產靈と云ふ人もあるが、どちらでも母系即ち水系であると云ふて居るのだ（講話七九）是れ

## 廣 告

本多日生現下講演

教育敕語と思想問題

統一臨時號

大正十年九月發刊

一部定價金貳拾五錢郵税金貳錢。百部以上貳割引、五十部以上一割引



## 記事

## 統一閣月報

## 巡回教化

△七月二日地明婦人會「法華經講義」本多現下、△同日夜青年會「撰時鈔講義」木村日保師「日蓮主義綱要」井村日成師、△三日「本佛現と愛の徹底」妹尾義郎「何を求むべきか」野老乾「聖訓要義」本多現下、△九日青年會「個人と國家」小林文學士「日蓮主義綱要」井村日成師、△十日「日本の國旗と日蓮聖人」藤江市「文藝と宗教と日蓮主義」木村義明師「日蓮主義より觀たる生活の安定不安定」野口日主師、△十六日青年會「日蓮主義綱要」井村日成師、△十七日「成佛論」村岡本量「佛教々典意識の評準」笹川日堂師、△廿三日「撰時鈔講義」木村日保師、△廿四日「富貴の價值」高木日靖師「菩薩行」山根日東師、△卅日青年會「撰時鈔講義」木村

日保師「日蓮主義綱要」井村日成師、△卅一日「先帝の御盛徳」大森日榮師「實土の實現」關田日城師。

□七月十一日夜東京市外大井町於大井館報國至誠團の發會式舉行、聽衆三百名、本團の綱領と事業、岡田團長「國體擁護の信念」土屋代議士「民心統一の眞諦」小松東海新聞社長「文化向上の方策」笹川僧正、□十六日平塚村田睦會、聽衆百五十名「思想問題の理解」笹川僧正、□十九日夜於南品川七丁目海邊大天幕利用施餓鬼法要並講演會、聽衆八百名「開會の辭」高木日靖師「妙法の權威」村岡本量師「自覺の力」笹川僧正、△廿日夜於同所、聽衆千二百名「開會の辭」村岡本量師「欲求の正路」高木布教師「この心」大森日榮師「思想善導と教化」笹川僧正。當日午後少年會あり、中島村岡兩師のお伽話あり、兩夜に亘る桃川蝶花君の乃木將軍傳の講談あり、巡回教化の

實績は到る處に多大の功を奏せり、本會の經費は小宮勉次郎氏外七丁目篤信者の喜捨する處なり。

## 名古屋白兵戰（其二）

□八月九日於檜崎清宅、川島常照、兒玉常宣、□同夜於議事堂前、兒玉常宣、二百余名、□十日於常徳寺少年少女會開催、夜議事堂前に於て宣傳、川島兒玉等出演、二百餘名、□十一日於議事堂前、川島兒玉聽衆三百餘名、□十二日同所、川島兒玉三百餘名、□十五日同所、二百餘名、□十六日於刈谷町長遠寺「信仰と生活」川島常照、□同夜道路宣傳兒玉師出演二百餘名、□十七日於常徳寺少年少女會、□同夜於相澤宅兒玉師出演、道路宣傳川島兒玉師、三百餘名、□十八日同所、川島兒玉、三百五十名、□十九日於高岳小學校「靈性の開拓」川島常照「靈性の運用」兒玉常宣終つて道路宣傳二百餘名、□廿日道路宣傳川島兒玉、四百餘名、□廿一日連夜基督教徒に

向つて砲火を開き居りし川島兒玉は、遂に勸告書を發して彼等の反省を求めた。四百名、□廿二日同所川島兒玉出演、聽衆の希望に依り立會演説となる、然し基督教牧師は逃げ去り、二三の信者残りて論辨せしも、其論旨悉く粉碎さる、聽衆は熱狂して基督教を葬れと叫ぶ、凡そ千餘名、□廿四日於同所、川島兒玉出演す、此夜社會主義者佛教改革團の旗號流押し立て來りて吾人に宣戰せしが、もろくも破れて旗捲き踏る、千餘名、□廿五日同町、川島兒玉三百餘名、□廿六日同所川島兒玉、二百名、廿八日同所川島兒玉、三百名、廿九日同所川島兒玉、三百名、卅日同所川島兒玉、尙中京法律學生松永君法制大學生某氏所感を述べられ、是れからの宗教は日蓮主義ならざるべからず、それは統一團諸師連夜の講演にて明瞭となれりとして熱心に述べられ、聽衆に多大の感動を與へたり、三百餘名、□卅一日於常徳寺少年少女會、夜宣傳川島兒玉出演せしが、社會主義者は



勞働服を着し、名古屋勞働協會の提灯を持ち來りて吾人と對陣す、されど間もなく敗北して歸る、□八月一日於岐阜縣駄知町講話川島兒玉出演、□同夜道路宣傳兩名出演、此夜社會主義者は小林名古屋勞働協會々頭指揮の下に來りて吾人と對陣す、余等も熱心に獅子吼し聽衆四百餘名、□二日同所、兒玉師出演小雨にて六十名、□三日同所、川島兒玉等出演三百名、□四月五日於大垣市宣傳、兒玉橋本栗田出演、六日於大垣常隆寺孟蘭盆會法要後講演、「開會の辭」兒玉常宣「感應道交」國友僧正、同夜於議事堂前川島兒玉二百餘名、□七日同所兒玉出演す、□同夜於常徳寺少年少女大會、「開會の辭」川島常照、獨唱岡崎千枝子、伊藤てる子、伊藤のぶ子、琴相澤愛子、お伽話大西先生、獨唱大橋とし子、岩井喜美子、福岡すゝ子、岸本なつ子、榎崎よし子、それより童話劇花園に移りしが満場破るが如き喝采程に閉會、尙今回の童話劇開催に就ては榎崎達子一家の多大なる

盡力と少女達の熱心なる努力とを感謝して、佛様の祝福を祈ります、千餘名。八日於常徳寺妙教婦人會講演「兒童と婦人」川島常照「信仰に就て」清水一乘「佛陀の實在」國友文學士、來會者二百餘名、

### 各地の思想戰

◎津山教報 七月一日於牧尾新太郎宅同心會、十二日於上ノ町弘通所顯本婦人會「日蓮聖人と云ふ方」能仁一十師、△十三日於河邊村日蓮主義講演會「死より生へ」能仁一十、□廿二日於弘通所參詣會「感慨と心の轉換」能仁一十、△卅日於鷹取村小學校思想問題講演會「幸福の爲に」能仁一十△卅日於久米銀行精神修養講演會「人生觀に就て」能仁一十。  
◎伯耆通信 六月一日於市橋宅「釋尊傳其五」富田日進、△廿日於本立寺聖葉團例會「慈悲に就て」富田日進、△一日於市橋宅「釋尊傳其六」富田日進、△八日於本立寺「藝術と感化」富田日進、宇都宮太

郎氏の統一節、△十七日於本立寺 明治天皇十周年報恩修法講演「大帝に報ゆるの道」富田日進「明治大帝の大御心と法華經」中川日史、△十八日於東郷村小學校民力涵養講演會「開會の趣旨」富田日進、世界的國民の自覺」中川文學士。

◎和氣通信 七月十日曾根護法會「吾徒の健闘」原田日勇、△十五日婦人會「幸福な信仰」原田日勇、△十六日同心會「緣起論」原田日勇、△廿八日天瀬修養會「法力」原田日勇、終つて會員十分演説。

◎久留米教報 七月卅日於本泰寺 明治天皇十週年報恩會動修後講演「勸語奉讀」中原山主「御書拜讀」平岡本信「報恩と信仰」吉見法榮「主師親三徳」松尾智教「至誠心」出海教師「聖傳統一節」藤本一得、△同夜「開會之辭」中原山主「勸語奉讀」天晴會幹事「諸法實相論」松尾智教「誠信如清水珠」出海俊義「予か國體觀念」中原法學士「餘興統一節」藤本一得。

因に天晴會布教部に於ては、本多猥下著「先帝の盛

徳と國民の反省」を來聽者に施本したり。

◎大阪通信 七月十二日於堂閣寺「誠の心」宮崎作二郎「苦痛より安樂へ」京藤義應「信仰の實義」上田布教師、聽衆五十名。△廿七日於堂閣寺「我建國の事實及理想」京藤義應「先帝の盛徳と國民の反省」上田布教師、聽衆七十五名。

◎盛岡通信 當地に於ても中央活動の主體たる本多猥下の宣傳に順應すべく、宗務當局特に國友僧正の指導に啓發せられ、高田日暢師入寺以來關若手郡長中村市助役、中平田縣屬、富田實踐女學校長、飯富岩手郡書記等計畫中なりし、盛岡日蓮主義研究會は七月廿四日其の發會式を舉行し、關法學士の聖語錄拜讀、中村市助役の報告及宣傳座長推舉幹事選定會日講本會費等の決議を了して後、高田講師開目鈔の三誓願に就て闡明する所ありて盛會裡に散會す。



# 日蓮聖人銅像建設趣意書

民衆教化の必要今日より急なるは無く就中都市の住民に於て特にその緊切なるを覺ゆ而して東京市に於ける民衆の集合地は淺草公園を以て第一と爲す若しこの淺草公園に集散する民衆に對して日夜に何等かの教化を與ふを得ばその影響する所必ずや多大なるものあらん此に於て乎同志相議し理想的なる日蓮聖人の銅像を建設せんとし地を十二階附近元慶印寺跡にトし工を斯界の大家岡崎雪聲氏に托し本年申を期してその工を竣らんとす慶印寺は不惜身命の行者日經上人の開創する所今や市區改正の爲め牛込原町に轉じ跡地は樂天地と稱して民衆娛樂の地たらんとす茲に靈地の渾滅を慨きその中央の地を淨めて偉聖日蓮の銅像を建設せんとするなり時恰も偉聖降誕七百年に相當するを以て記念事業の一としてこの舉を世間に推奨し清淨なる喜捨を得て大善功德を分たんとす由來東京の住民は日蓮崇拜の精神頗る旺盛なれば偉聖の風貌に接し觸目禮拜の間に日蓮の如き剛健、感恩、慈愛、熱誠、抱負、信仰、法悅、滿足を得又立正安國、知法思國、大義名分、父母孝養、衆生相互恩、開顯統一、皆歸妙法の大精神に感孚するあらばその效果蓋し尠少ならざるべし日蓮聖人曰く日は東より出でて西を照す日出づれば星隱ると大方の士女清き一片の贊同を寄せられんことを

時大正十年二月吉祥日

## 發起人 (順序不同)

陸軍大將 大迫尚道 宮原六郎 玉川由太郎 山田英二  
海軍中將 宮岡直記 加藤信義 久保田雅巳 龜井利一  
陸軍少將 小原正恒 三浦大五郎 五十嵐 正  
陸軍少將 野澤悌吾 木橋利平 内海顯二  
文學博士 井上智次郎 陸軍大將 井口省吾

## 贊成者 (イロハ順)

海軍造船少將 岩野直英 本門宗總監 井上日光  
深川妙壽寺 石田顯隆 關本法華宗管長 本多日生  
海軍大將元帥 東郷平八郎 日蓮宗管長 河合日辰  
法學博士 寬 克 彦 皇民會理事 龜岡豐二  
衆議院議員 金光唐男 覺王山信徒總代 加藤慶二  
國社會總裁 田中智學 陸軍中將 高橋義章  
法華宗管長 津田日彰 前大審院檢事 矢野 茂  
自衛會理事 安岡繁種 愛知縣市部會議長 山田才吉  
警察講習所長 松井 茂 海軍少將 松本有信

法華宗前管長 藤平日學 海軍造船中將 福田馬之助  
陸軍中將 福田雅太郎 議會社重役 深見榮太郎  
海軍中將 佐藤藏太郎 本妙法華宗管長 清瀬日守  
貴族院議員 木内重四郎 本門法華宗管長 木村日舜  
文學博士 白鳥專吉 衆議院議員 望月小太郎  
本門法華宗前總監 智 孝 株式會社委員 鈴木常吉

## 工事設計

一日蓮聖人銅像 壹 基  
一立像高さ壹丈貳尺銅臺(高さ八寸二分八角形直徑四尺五寸)を漆  
へ上等研磨仕上げとす  
一臺石高さ壹丈四尺厚多木産花崗石圓面通り水磨とす、地形は松  
生林或間半物を打詰め方或間厚さ五尺コンクリートを打ち基礎  
石を据へること  
一銅像は稲田産花崗石を以て圓面通り徹磨叩き仕上と爲す銅は鑄  
物とし礎石を据付け内部は剝栗地形の上にコンクリートを打  
堅め、礎てモルター塗仕上とし、表面へ多層用砂利小粒厚さ壹  
寸通り敷くこと

## 工事豫算

一金壹萬七千五百圓也 經費總額  
內 拜  
一金五千五百圓也 原型製作料圖案より五分の一圓形壹個壹丈  
貳尺木原型壹體石骨仕上まで陸費

## 寄附行爲規定

- 一、寄附費は多少を問はず之を受納す寄附金は事務所へ申込送金ありたし但數回に分納せらるるも差支へなし
- 二、寄附金の送附は可成振替口座東京四四三〇三番日蓮聖人銅像建設事務所へ振込ありたし
- 三、寄附者の芳名は巻物に録し銅像に入れ臺石中に收む
- 四、寄附金申込終了期を本年十月三十一日とす
- 五、寄附金豫定工費額以上に達したるときは發起者會の議に附し保存費並に民衆教化の費に充つ
- 六、寄附金豫定工費額に達せざるときは不足額は發起者中に於て之を支辨すべし
- 七、會計擔任者は發起者中の加藤信義、宮原六郎、玉川由太郎とし寄附金に對しては會計列名捺印の受領證を差出すべし

東京市淺草區北清島町統一階内  
日蓮聖人銅像建設事務所



「唯一」主幹 宮澤英心先生著

# 法華經の人生及宇宙觀

▲四六版形四百頁 ▲定價金參圓  
▲箱入體裁優美 ▲送料拾貳錢

五部以上の購入者には特價の上更に送料割引申込は特價期間に限る遅れる方は御損なり

本篇は著者が宗教界に身を投じて廿年の今日に漸く獲得したる法華經の信念より觀たる人生及宇宙に對する信仰の告白にして本書を一度讀めば妙經に包容されたる人生問題・社會問題・道德問題・宗教問題は勿論のこと日蓮主義の要諦を證得し娑婆即寂光の大安心を得らるゝの寶典にして若し之を本化的に云へば著者が當家の本佛に對する信仰告白であつて全篇悉く本佛の顯現としての人生及び宇宙觀を論述せるもので從來のお説教式佛陀論や文字學者の本佛論とは全然その類を異にし現代の科學的立場を以て絕對本佛の實在を説き法界の森羅萬象を一大佛陀視して宇宙は其儘に眞善美の結晶なりと論斷せるもので從來の日宗僧俗が未到の境地として不問に附せる所を遺憾なく發揮せり殊に社會主義と佛教及びその異同并に非社會主義的宗教と非宗教的社會主義とを辨別して兩者は必ず將來提携すべきものなりと論斷せる所は著者獨特の創見にして是丈けにても恐らく天下無二の名著と云ふべきなり

本會十周年記念特價販賣

▲特價金貳圓五拾錢  
▲特價發賣期間九月卅日迄

▲送金は振替口座を使用せらるが便利

申込殺到勿ち四版を出す

發行所

大阪市南區難波青原町  
振替口座大阪一六四八一番

日宗唯一會

本多日生現下著書一覽

- 法華經の心髓 金壹圓六拾錢
- 日蓮主義初步 金七拾錢
- 日蓮主義 金壹圓五拾錢
- 修養と日蓮主義 金壹圓五拾錢
- 國民道德と日蓮主義 金壹圓五拾錢
- 日蓮聖人正傳 金貳圓貳拾錢
- 日蓮主義綱要 金貳圓貳拾錢
- 日蓮聖人の感激 金貳圓貳拾錢
- 日蓮主義の運用 金貳圓五拾錢
- 東洋文明の權威 金貳圓貳拾錢
- 國民教化 金貳圓貳拾錢
- 法華經の伴 金貳圓貳拾錢
- 戰士の伴 金貳圓貳拾錢
- 思想問題の歸結と法華經 金貳圓
- 聖訓要義 各卷壹圓貳圓貳拾錢
- 開目抄詳解 上卷一部金貳圓八拾錢
- 聖語錄 金貳圓八拾錢
- 優婆塞戒經通解 金八拾五錢
- 大乘本生心地觀經通解 金八拾五錢
- 法華經講義 以上各送料一部金八錢

上卷下卷各一部金壹圓四拾錢  
送料一部金拾八錢

○大藏經要義 一部金壹圓八拾錢  
○法華經要文 上製金壹圓拾錢  
○先帝の盛徳と國民の反省 送料一部金貳錢

以上購讀希望の方は左記へ申込さるべし  
東京市外品川町妙國寺内  
大藏經要義刊行會  
振替東京三一五九六番

料告廣	價定一統
一頁	金參拾錢
一ケ年	金參圓參拾錢
四分ノ一頁	金參圓
半頁	金六圓
一頁	金拾圓
一ケ月	金參圓
一ケ年	金參圓
一ケ月	金參圓
一ケ年	金參圓

大正十年八月廿七日印刷納本  
大正十年九月一日發行

不許複製

編輯所 東京市神田區美土代町二丁目一番地  
發行所 東京市神田區美土代町二丁目一番地  
印刷所 東京市神田區美土代町二丁目一番地  
編輯所 東京市神田區美土代町二丁目一番地  
發行所 東京市神田區美土代町二丁目一番地  
印刷所 東京市神田區美土代町二丁目一番地





目 次

更に進め我軍の戦士……………	本多日生
本經祖書要文講義……………	本多日生
佛教の大要……………	本多日生
遠慮なき皇道大本教の批判……………	記者
日蓮聖人教義綱要……………	井村日成
記事報道十數件……………	

第廿五年十月號